京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-1

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二〇－一
室町殿跡・上京遺跡
公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

室町殿跡・上京遺跡

2020年

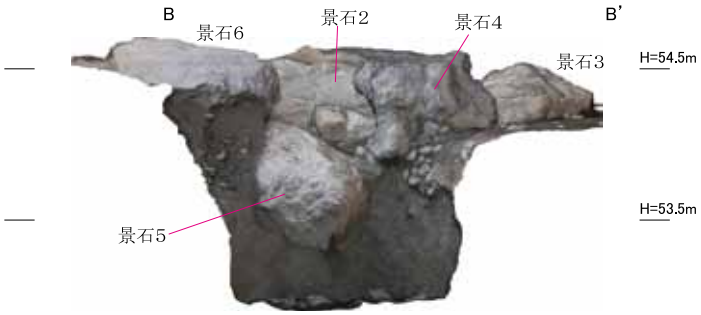
公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

室 町 殿 跡 ・ 上 京 遺 跡

2020年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

第２面全景（西から）



※ A－A'・B－B'は図版5に対応。

0　2m

滝石組75　３次元測量画像（１：50）

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、ビル新築計画に伴う室町殿跡・上京遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

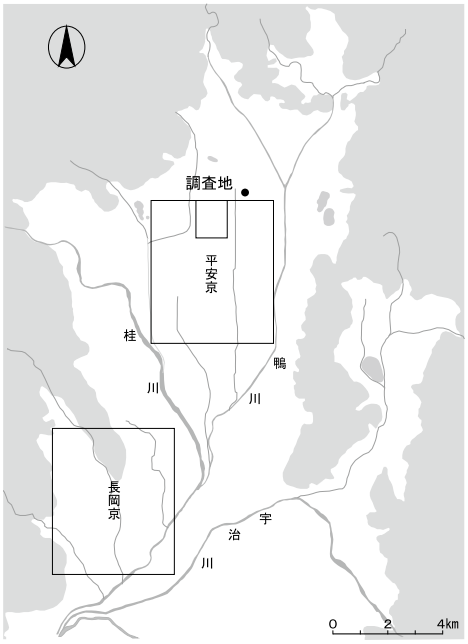
令和２年９月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	室町殿跡・上京遺跡　（京都市番号　19 S 334）
2	調査所在地	京都市上京区御所八幡町110－13・14・15
3	委　託　者	株式会社占部組　代表取締役　矢野充一
4	調 査 期 間	2020年１月27日～2020年４月10日
5	調 査 面 積	120㎡
6	調査担当者	松永修平
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「相国寺」・「船岡山」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
13	本 書 作 成	松永修平
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協　力　者	調査・遺物整理には下記の方々にご教示頂いた。記して感謝申し上げます。ガラス製品分析：北野信彦氏（龍谷大学教授）、石材鑑定：橋本清一氏（元京都府立山城郷土資料館）



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
２．位置と環境 …… 3
（１）歴史的環境 …… 3
（２）既往の調査 …… 3
３．遺　　構 …… 6
（１）基本層序 …… 6
（２）遺構の概要 …… 6
（３）室町時代（第２面）の遺構 …… 6
（４）安土桃山時代から江戸時代（第１面）の遺構 …… 8
４．遺　　物 …… 11
（１）遺物の概要 …… 11
（２）土器類 …… 11
（３）瓦類 …… 17
（４）土製品 …… 18
（５）ガラス製品 …… 19
（６）金属製品・銭貨 …… 20
５．ま と め …… 22
（１）室町時代 …… 22
（２）安土桃山時代から江戸時代 …… 24

図　版　目　次

巻頭図版１　遺構　第２面全景（西から）
巻頭図版２　遺構　滝石組75　３次元測量画像（１：50）

図版１　遺構　室町時代（第２面）遺構平面図（１：80）
図版２　遺構　安土桃山時代から江戸時代（第１面）遺構平面図（１：80）
図版３　遺構　調査区南壁断面図（１：60）
図版４　遺構　調査区西壁断面図（１：60）
図版５　遺構　滝石組75実測図（１：50）

図版６　遺構　井戸41、石室５・36・39実測図（１：30）
図版７　遺構　石室34・35・74実測図（１：30）
図版８　遺構　石室37・45実測図（１：30）
図版９　遺構　石室52・55・68・71実測図（１：30）
図版10　遺構　土坑２・14・32・67実測図（１：40）
図版11　遺構　１　調査区西半第２面全景（東から）
　　２　調査区西半第２面全景（北から）
図版12　遺構　１　調査区西半第２面全景（北東から）
　　２　滝石組75（北西から）
　　３　滝石組75（南東から）
図版13　遺構　１　土坑72と滝石組75（北東から）
　　２　土坑72（北東から）
　　３　陸部造成土断割状況（南西から）
図版14　遺構　１　調査区西半第１面全景（南東から）
　　２　調査区東半第１面全景（南西から）
図版15　遺構　１　石室74・34・35・36（西から）
　　２　石室74（東から）
　　３　石室74と景石８（北東から）
図版16　遺構　１　石室45（北西から）
　　２　石室45（北東から）
　　３　石室71（北東から）
図版17　遺物　土器類
図版18　遺物　土器類・土製品

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：2,500）　……　1
図２　調査区配置図（１：500）　……　2
図３　調査前全景（南から）　……　2
図４　作業状況（北東から）　……　2
図５　報道発表（東から）　……　2
図６　砂養生による埋め戻し状況（北西から）　……　2
図７　周辺調査位置図（１：2,500）　……　4

図８　陸部造成土断割断面図（１：40）…… 7
図９　柱穴列１実測図（１：40）…… 8
図10　陸部造成土出土土器実測図（１：４）…… 11
図11　土坑72出土土器実測図（１：４）…… 12
図12　石室37・45・68・71、土坑２・14・32・40出土土器実測図（１：４）…… 13
図13　土坑１出土土器実測図（１：４）…… 15
図14　土坑31、石室５・34・35・74、井戸41出土土器実測図（１：４）…… 16
図15　瓦類拓影及び実測図（１：４）…… 17
図16　土製品拓影及び実測図（１：２）…… 18
図17　ガラス製品実測図（１：１）…… 19
図18　ガラス小玉（拡大）…… 20
図19　ガラス管・ガラス板片　…… 20
図20　金属製品実測図（１：２）…… 20
図21　銭貨拓影（１：２）…… 20
図22　義政期室町殿範囲復元図（１：2,000）…… 23
図23　各調査の標高模式柱状図（１：50）…… 23

表　目　次

表１　周辺調査一覧表　…… 5
表２　遺構概要表　…… 6
表３　景石一覧表　…… 7
表４　遺物概要表　…… 11
表５　泥面子一覧表　…… 19
表６　銭貨一覧表　…… 21
表７　各調査の陸部・池底標高一覧表　…… 23

室町殿跡・上京遺跡

１．調査経過

本調査は、（仮称）烏丸今出川ビル新築計画に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地は、京都市上京区御所八幡町110－13他に位置しており、室町殿跡及び上京遺跡にあたる。工事に先立ち京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が、試掘調査を行ったところ、室町時代の遺構が良好に遺存していることが確認されたことから、原因者である株式会社占部組に対して発掘調査の指導が行われた。調査は、株式会社占部組から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査は、令和２年１月27日に西側の１区から開始した。当初、調査区は排土置き場の関係から東西の２区に分けて行うこととしていたが、１区の調査中、室町時代の庭園遺構が東側に延長することが確認されたため、東側の２区も同時に調査を行うことが望ましいと判断した。このため、室町時代の遺構密度が低い１区南側の一部の調査を先行して終了し、ここを排土置き場として、引き続き２区を掘削し、１つの調査区として調査を行った。

調査の結果、安土桃山時代から江戸時代の石組の遺構、室町時代の室町殿の庭園遺構（園池及び景石群）を検出した。検出した遺構は、実測・写真・オルソ測量・３次元写真測量（使用ソフト：コンテキスト　キャプチャー、ベントレー・システムズ社）などによる記録を行った。なお、検出した遺構の内、室町時代の庭園遺構は原因者の協力により、地中保存されることが決定したため、この部分は、砂入りの土嚢で養生し厚さ約30㎝の砂で覆い保護した後、埋め戻した。４月10日に

図１　調査位置図（１：2,500）

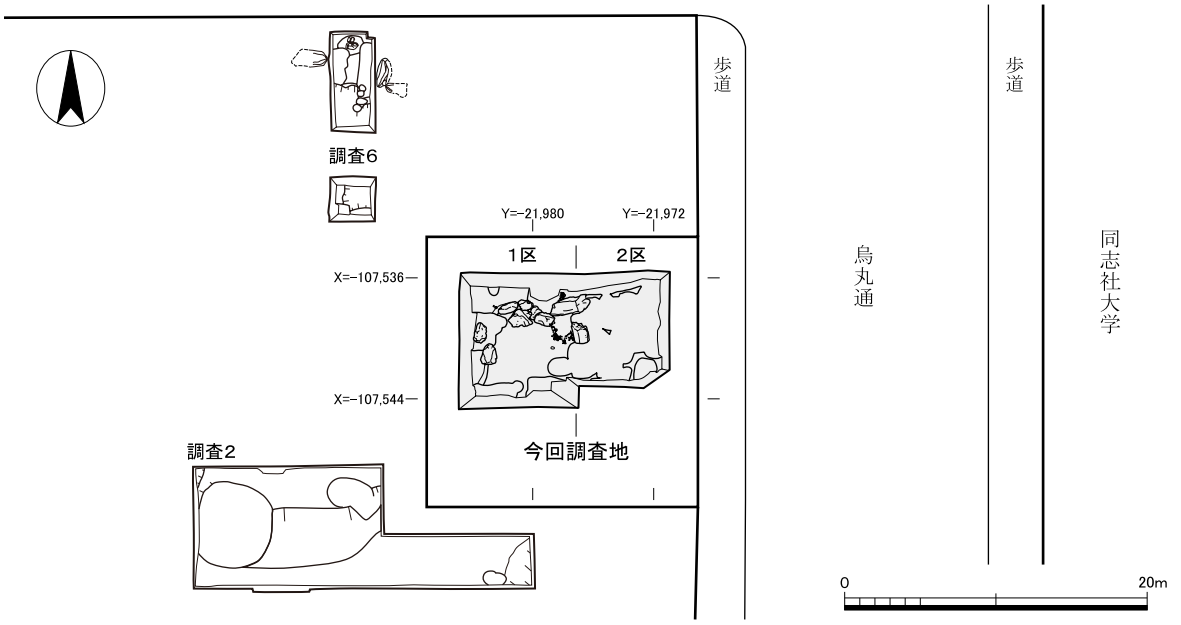


図２　調査区配置図（１：500）

図３　調査前全景（南から）

図４　作業状況（北東から）

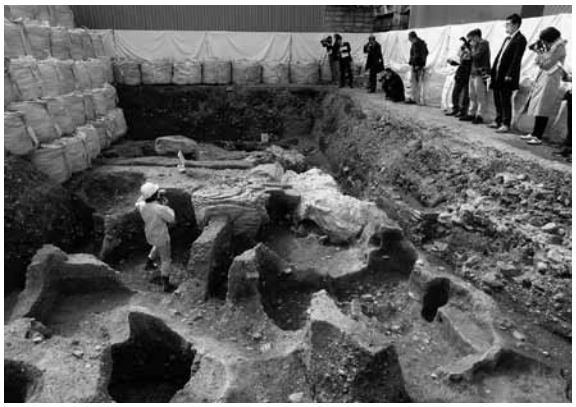


図５　報道発表（東から）

図６　砂養生による埋め戻し状況（北西から）

全ての作業を終了した。

調査中は、適宜文化財保護課の臨検を受け、検証委員である立命館大学の木立雅朗氏、同志社大学の浜中邦弘氏の指導を受けた。

また、４月３日には報道発表を行い、調査成果の公表に努めた。

２．位置と環境

（１）歴史的環境

調査地は、平安京の北端から約450ｍ北側に位置し、室町殿跡・上京遺跡にあたる。

上京遺跡とは、御所が現在地付近に固定された室町時代に、将軍や武家・公家の屋敷、寺院などが集まることで形成された市街地遺跡のことをいう。遺跡に指定されている範囲は、おおよそ北は紫明通、南は一条通、東は寺町通、西は智恵光院通までである。

また、室町殿は永徳元年（1381）に室町幕府第３代将軍足利義満によって造営された足利将軍家の邸宅のことで、「花の御所」とも呼ばれる。「室町殿」の名称は、この邸宅の正門が室町通に面して設けられていたことに由来している。室町殿は、義満以降も足利将軍家の邸宅として使用され、義満の子である６代将軍義教が永享３年（1431）に再築し、会所などの施設を設けている。さらに義教の子である８代将軍義政も長禄３年（1459）に室町殿の造営を開始し、長禄４年（1460）にほぼ完成する。しかし、文明８年（1476）に焼失して以降は、再建の動きはあったものの実現はせず、「花御所跡」などの名称は残る[1)]が、室町殿跡地は町屋の空間へと変わっていくこととなる。

室町殿の位置に関しては、川上 貢氏が文献資料から北小路（現在の今出川通）以北・室町以東・今出川（現在の烏丸通）以西・柳原以南であると言及しているが、柳原がどの通りに相当するのかについては明らかにしていない[2)]。高橋康夫氏は、この柳原を現在の上立売通と推定している[3)]。一方で、その規模については、文献資料からは『大乗院寺社雑事記』文明11年（1479）３月６日条に「もともと東西行四十丈（約120ｍ）、南北行六十丈（約180ｍ）あった敷地が、南北行が四十丈に縮小した」と記されているのみで、詳細については不明である。

（２）既往の調査（図７、表１）

室町殿跡に関する調査は、1974年に初めて行われた（調査１）。この調査では、室町時代の南北方向の溝が検出されており、その位置からこの溝は室町殿の東限を画する溝だと考えられる。1979年には、今回の調査地の南側で調査が行われ（調査２）、室町時代後期の南に向かって下がる池跡を検出している。1985年に行われた立会調査（調査５）で、室町時代後期の庭石４石や池の汀を検出している[4)]。1986年に行われた調査６では、室町時代の南に向かって下がる池跡を検出し、その後の工事に伴う立会調査では庭石を３石検出している。1989年に行われた調査７では、室町時代後期の築山、景石２基、東西方向の溝（堀）を２条検出している。この堀は、室町殿の南限に関わるものと考えられる。2002年に同志社大学が行った発掘調査では、調査８－１で東西方向の石敷遺構を検出している。これは室町殿の北限を画する築地塀の基礎の可能性が考えられる。また、調査８－２で室町時代の建物跡が検出されている。調査10では、室町殿の西限を画する南北方向の堀を検出している。調査11～21では、室町時代の遺構は多くは確認されておらず、調査16で南北方向の溝を、調査18で東西方向の溝２条を、調査21で布掘柱列を検出しているのみである。

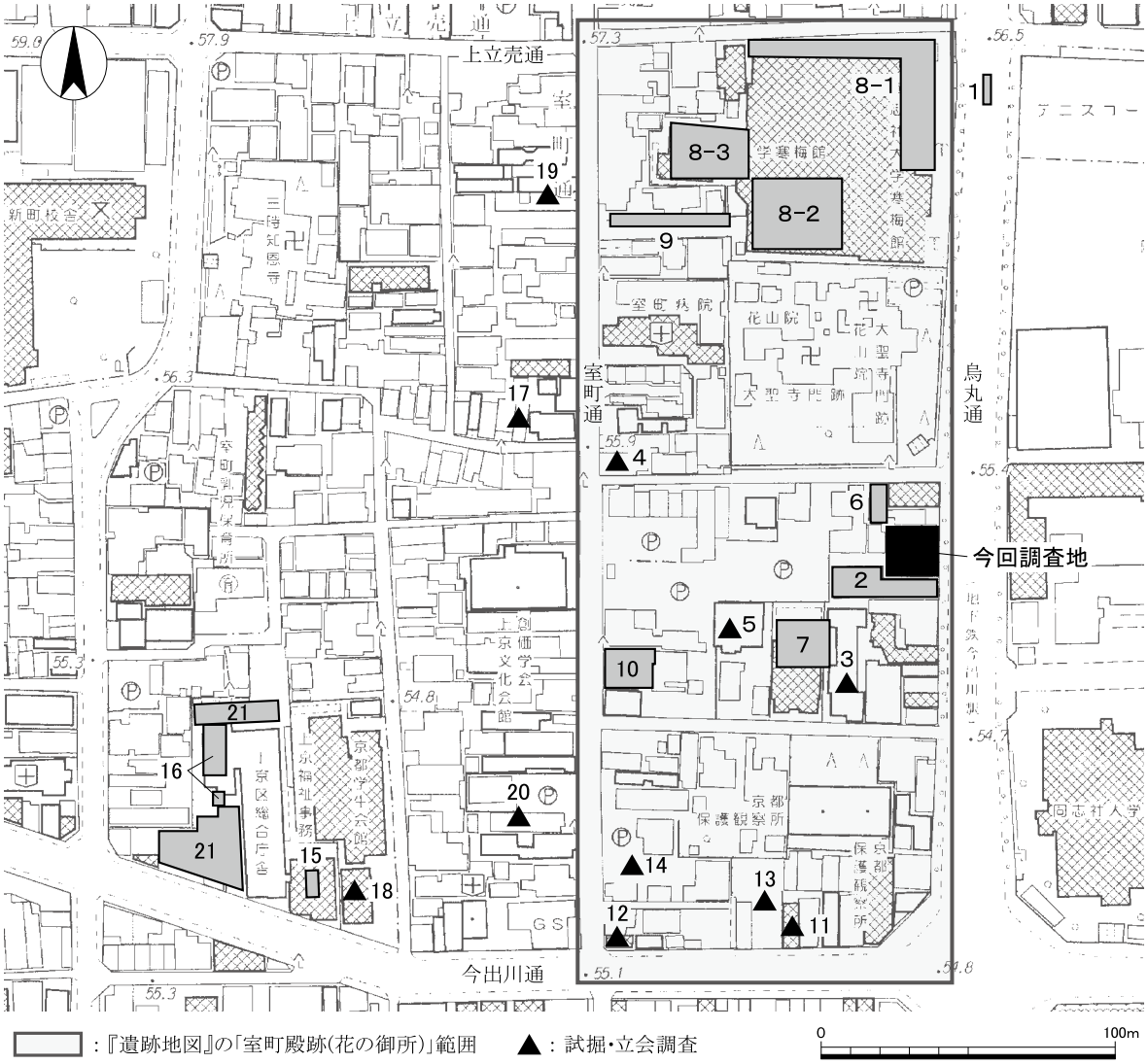


図７　周辺調査位置図（１：2,500）

以上のとおり、今回の調査地周辺では、景石等の庭園遺構を検出していることから、本調査地も室町殿の庭園の一画であると推定し、調査を行った。

註

１）『蔭涼軒日録』文明十七年八月十四日条 「…點撿了一揆衆相集于花御所跡者凡千人許…」

２）川上 貢『日本中世住宅の研究〔新訂〕』 中央公論美術出版　2002年

３）高橋康夫「足利義満の「王都」－大規模開発と地域空間形成」『海の「京都」』 京都大学学術出版会 2015年

４）調査５の報告では、調査区南端で検出した南方向への下りを池の汀だとしているが、東側で行われた調査７で検出した東西方向の溝（堀）の延長線上に位置することから、これは溝（堀）の一部であると考えられる。

表１　周辺調査一覧表

番号	調査年度	調査方法	調査機関	調査地	調査面積（㎡）	主な成果	文献
1	1974	発掘	烏丸線	上京区烏丸通上御霊下る相国寺門前町	16	室町時代の遺物包含層、溝、土坑など。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』
2	1979	発掘	烏丸線	上京区烏丸通今出川上る西入御所八幡町	139	室町時代後期の池状遺構、南北方向の溝など。	『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』
3	1983	試掘	埋文研	上京区烏丸通今出川上る西入岡松町258-1	―	室町時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』
4	1983	立会	埋文研	上京区室町通上立売下る裏築地町98	―	GL-0.7mで江戸時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』
5	1985	立会	埋文研	上京区烏丸通今出川上る西入岡松町254-1	55	室町時代後期の池の汀など。	「室町殿跡(RH18)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和60年度』
6	1986	発掘	埋文研	上京区烏丸通今出川上る御所八幡町110-5	28.5	室町時代の庭園の石組遺構、礫敷遺構など。	「室町殿跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』
7	1989	発掘	埋文研	上京区烏丸通今出川上る岡松町・御所八幡町	262.5	室町時代後期の石組遺構、溝、築山、景石など。	「室町殿跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
8	2002	発掘	同志社大学	上京区御所八幡町103	2066	室町時代の石敷遺構、石組水路。	『学生会館・寒梅館地点発掘調査報告書－室町殿と近世西立売町の調査－』
9	2003	発掘	同志社大学	上京区裏築地町	90	江戸時代の石敷、石組、瓦組遺構など。中世以前は掘削深度の関係で未調査。	「同志社大学旧大学会館地点(室町殿)第3期発掘調査報告」『同志社大学構内遺跡発掘調査報告書(2003・2005年度)』
10	2018	発掘	保護課	上京区築山北半町230	54	室町時代後期の南北方向の濠。室町時代末～江戸時代の井戸、東西方向の溝など。	「室町殿跡(花の御所)・上京遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成30年度』
11	1980	立会	埋文研	上京区今出川通烏丸西入今出川町319-4	―	GL-0.65mで江戸時代の遺物包含層、GL-1.2mで室町時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　昭和55年度』
12	1985	立会	埋文研	上京区室町通今出川上る築山南半町250	―	GL-0.9m以下室町時代後期の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和60年度』
13	2004	試掘	保護課	上京区室町通今出川上る築山南半町244-1他	―	GL-1.6mで室町時代の整地層。	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』
14	2004	試掘	保護課	上京区室町通今出川上る築山南半町244	―	GL-2.44mまで江戸時代末の堆積層、これ以下は未確認。	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成17年度』
15	1978	発掘	埋文研	上京区今出川通新町東入掘出シ町28	60	江戸時代の井戸、石室、土坑など。建仁寺銘瓦出土。	「室町殿跡」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
16	1979	発掘	埋文研	上京区今出川通新町東入掘出シ町289	200	室町時代の南北方向の溝など。	「室町殿跡」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』
17	1983	立会	埋文研	上京区室町通上立売下る裏築地町97	―	GL-0.8mで遺物包含層、江戸時代3期、室町時代1期。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』
18	1989	試掘	埋文研	上京区衣棚通今出川上る畠山町206他	80	平安時代前期～江戸時代の遺構群。室町時代は東西溝2条。	「室町殿跡隣接地(RH18)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』
19	2002	立会	埋文研	上京区室町通上立売下る裏築地町84	―	GL-1.46mで室町時代後期の遺物包含層、GL-2.45mで地山。	『京都市内遺跡立会調査概報　平成13年度』
20	2009	試掘	保護課	上京区室町通今出川上る築山南半町240	―	GL-2.2mで室町時代の遺物包含層。	『京都市内遺跡試掘調査報告　平成21年度』
21	2013	発掘	埋文研	上京区今出川通室町西入掘出シ町289他	590	鎌倉時代～江戸時代の遺構群。室町時代は布掘柱列など。	『上京遺跡・室町殿跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-8
今回調査	2019	発掘	埋文研	上京区御所八幡町110-13他	120	室町殿の庭園遺構。安土桃山～江戸時代の石室、井戸、土坑など。	本報告

※ 烏丸線：京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、埋文研：財団法人・公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所、
保護課：京都市文化財保護課

３．遺　　構

（１）基本層序（図版３・４）

調査地の現地表の標高は55.8ｍ前後である。層序は、地表下約1.0ｍまでが近・現代盛土、さらに江戸時代中期から後期の整地層が約0.5ｍ堆積する。その直下に安土桃山時代から江戸時代初頭の整地層が約0.1～0.5ｍ、その下層に室町時代の整地層（庭園の造成土）が約0.4～1.0ｍ堆積し、以下地山と続く。地山は、室町殿期の土地改変の影響を受けてか、Y=−21,976辺りから西に向かい約0.4～0.6ｍ下降している。

（２）遺構の概要

検出した遺構数は76基で、時期は室町時代から江戸時代である。調査では、安土桃山時代から江戸時代を第１面、室町時代を第２面として調査を行った。遺構数の割合は、安土桃山時代から江戸時代の遺構が大半を占め、多数の石室や、灰が廃棄された土坑などがある。室町時代の遺構は、主に室町殿期の庭園遺構とその廃絶後に景石が落とし込まれた土坑72などである。

以下、主な遺構を第２面、第１面の順に記す。

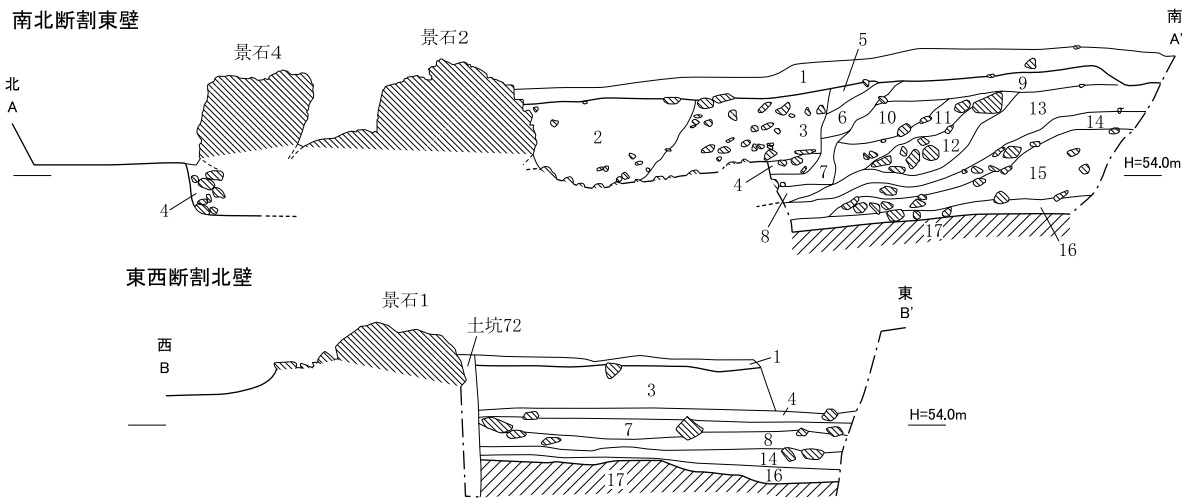
（３）室町時代（第２面）の遺構（巻頭図版１、図版１・11・12）

池部76　南岸と東岸を検出した。池は調査区の北・西側に広がり、調査区外へ続く。ただし、今回の調査区では水が溜まっていた痕跡が認められないことから、滞水域は調査区外の北・西側であると考えられる。

陸部（図８、図版13）　調査区の南側に広がり、池部から南東方向に向かって標高が高くなる。陸部は調査区中央周辺が最も高く標高54.6ｍ前後で、池部底面が標高54.1ｍ前後であることから、陸部と池部の標高差は約0.5ｍである。陸部の造成過程を明らかにするため、Y=−21,960付近で南北方向の断ち割り調査を行った。整地層は２～４層・５～８層・９～16層の大きく３群に分かれる。９～16層は陸部構築の造成土である。地山直上に粘質土と砂礫土を交互に突き固めて陸部の構築を行っている。地山層上面に土壌化層が認められないことから、一定程度地山層を掘削してから造成を行っているとみられる。２～４層は滝石組75の景石２・４設置時の掘形となるもので、景

表２　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
室町時代	庭園遺構（池部76・陸部・滝石組75・景石）、土坑72	滝石組75は６石の景石から構成される。景石は９石検出した。うち１石は土坑72に落とし込まれていた。
安土桃山時代～江戸時代	柱穴列１、石室５・34～37・39・45・52・55・68・71・74、井戸41、土坑１・２・４・14・28・31・32・40・43・67、集石土坑11など	



1 10YR6/3にぶい黄橙色細砂 土師器片・炭少量混
2 10YR4/2灰黄褐色砂泥 炭わずかに混
3 10YR3/4暗褐色砂泥 炭混、φ10～15cmの礫中量
4 10YR4/4褐色砂礫 φ10～15cmの礫多量
5 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 φ2～5cmの礫少量混
6 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 土師器片わずかに混
7 10YR3/3暗褐色砂泥、微砂混 炭わずかに混
8 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、粘性あり 土師器片わずかに混
9 10YR3/3暗褐色砂泥 土師器片・炭少量混、φ2～5cmの礫少量混
10 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 土師器片少量混
11 10YR4/4褐色砂泥 φ10cm程の礫少量混
12 10YR3/4暗褐色砂礫 φ10～20cmの礫多量混
13 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、微砂混
14 10YR4/2黄灰褐色砂礫
15 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、粘性あり、微砂混
φ5～10cmの礫少量混、炭わずかに混
16 10YR4/4褐色砂泥、粘性あり 土師器細片わずかに混
17 7.5YR4/6褐色砂礫（地山）

※ A－A'・B－B'は図版1に対応。

0 2m

図８ 陸部造成土断割断面図（１：40）

石の設置面となる４層は礫層である。５～８層は、その底面レベルが景石４北側で確認した４層下面のレベルと同じであることから、２～４層と一連の掘形である可能性がある。１層は景石設置後の仕上げの整地層である。11～13層から15世紀後半の土師器皿が出土している。

滝石組75（巻頭図版２、図版５・12・13） 景石２～７が近接し、互いに組まれており、滝石組を構成していると考えられる。景石２が鏡石、景石５が水受け石に相当する。とすれば、滝の正面は北東となる。ただし、陸部では遣水などの導水施設が認められないことから、いわゆる枯滝で

表３ 景石一覧表

番号	石材	長径(m)	中径(m)	短径(m)	重さ(t)推定	円磨度	備考
景石1	ホルンフェルス	1.4	1.0	0.45	1.6	0.4～0.5	
景石2	頁岩ないし粘板岩	1.6	1.2	0.6	3.1	0.4	滝石組75を構成する。
景石3	チャート	1.45	0.65	0.5	1.2	0.3～0.4	
景石4	チャート	0.95	0.7	0.65	1.1	0.3～0.4	
景石5	珪岩	1.1	0.95	0.7	1.9+	0.3	
景石6	チャート	1.3	0.9	0.5	1.5	0.3	
景石7	チャート	2.75	1.2	1.15	9.8	0.3	
景石8	チャート	1.65	1.1	0.85	4.0	0.4	
景石9	チャート	1.8	0.8	0.4+	1.5+	※3	土坑72に落とし込まれ、元位置を保っていない。

※ 長径は最大の長さ、中径は長径と平面的に直行する方向の最大の長さ、短径はその平面と直交する最大の長さ。
※ ＋は土中にあり最大規模が不明なものを示す。
※3 鑑定時未検出のため不明。0.3ほどか。

あったと考えられる。景石の詳細は表３にまとめた。

景石は、円磨度[1)]が0.3～0.4と低く角張っている。石材の産地については、すべて丹波帯域、特に高野川系統の上流、または高野川東側の支流河川域と考えられる。

土坑72（図版13）　調査区西端で検出した土坑である。規模は、東西1.6ｍ以上、南北約2.6ｍである。検出面から約1.7ｍ掘り下げたが、作業の安全性を考慮して、これより下層及び南半は未掘である。調査区西側へ延長する。規模・形状から井戸と考えられる。この土坑には、約1.8ｍ×0.8ｍの景石（景石９）が落とし込まれていた。埋土からは16世紀中頃から後半の土器類が出土している。

（４）安土桃山時代から江戸時代（第１面）の遺構（図版２・14）

柱穴列１（図９）　調査区の西端で検出した南北方向３間の柱穴列である。掘形規模は径0.4～0.5ｍ、深さ0.15～0.2ｍである。柱間は不等間で0.8～1.2ｍである。埋土から17世紀後半の土師器片などが出土している。

石室５（図版６）　調査区の北西部で検出した円形の石室である。石組は基底部の１～２段のみが残存する。掘形規模は径約1.6ｍ、深さ約0.7ｍ、石組の内法は径約0.8ｍである。底面は粘土質の地山であり、水溜もしくは貯蔵施設と考えられる。埋土から18世紀代の土器類が出土している。

石室34（図版７・15）　調査区の北東部で検出した円形の石室である。掘形規模は径約1.35ｍ、深さ約0.4ｍ、石組の内法は径約0.9ｍである。石材は10～20㎝ほどの川原石が大半で、小口面を内側に向け円形に積み上げる。埋土から18世紀代の土器類が出土している。

石室74（図版７・15）　石室34の西側で検出した隅丸方形の石室で、東側が石室34により削平を受ける。掘形規模は一辺約1.7ｍ、深さ約0.8ｍ、石組の内法は径約1.0ｍである。また、室町殿期の景石７と景石８の一部を割り取って石組の壁として利用していた。石材は10～20㎝ほどの川原石が大半で、小口面を内側に向け隅丸方形に積み上げる。底面は粘土質の地山であり、水溜もしくは貯蔵施設と考えられる。埋土から18世紀代の土器類が出土している。

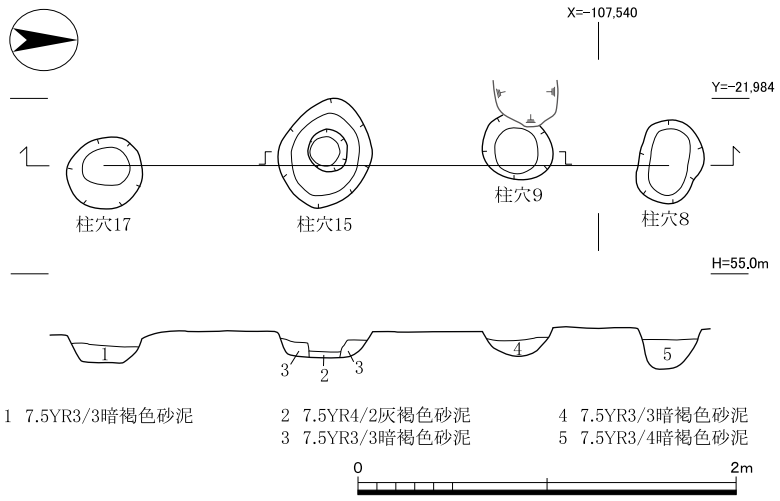


図９　柱穴列１実測図（１：40）

石室35（図版７・15）　調査区の北東部で検出した円形の石室である。掘形規模は径約1.5ｍ、深さ約1.0ｍ、石組の内法は径約0.8ｍである。石材は約20㎝の川原石が大半で、小口面を内側に向け円形に積み上げる。少量ながら漆喰片も利用されていた。底面は粘土質の地山であり、水溜もしくは貯蔵施設と考えら

れる。埋土から18世紀代の土器類や土製品が出土している。

石室36（図版６・15） 調査区の北東部で検出した東西方向に長い方形の石室である。軸線は東に対してやや北に振る。掘形規模は東西約1.5ｍ、南北約1.2ｍ、石組の内法は南北約0.7ｍである。石材は15～30㎝の川原石を小口面を内側に向け方形に積み上げる。また底面には約30㎝の石を遺構の長軸方向と揃えるように３石据えている。埋土から17世紀前半頃の土器類の小片が出土している。

石室37（図版８） 調査区の東部南北中央で検出した東西方向に長い方形の石室である。東部・南東部は後世の土坑によって一部削平され、石組は基底部の１～２段のみが残存する。掘形規模は東西1.6ｍ以上、南北約1.4ｍ、深さ約0.75ｍ、石組の内法は東西約1.2ｍ、南北約0.8ｍである。石材は10～25㎝の川原石が大半で、小口面を内側に向け方形に積み上げる。埋土から17世紀前半の土器類やガラス製品が出土している。

石室39（図版６） 調査区の南東隅で検出した方形の石室である。掘形規模は東西約1.2ｍ以上、南北約0.7ｍ以上で、深さは約0.2ｍ、石組の内法は東西約0.75ｍ、南北0.3ｍ以上である。東側・南側は調査区外へ延長する。石材は15～25㎝の川原石を小口面を内側に向け方形に積む。埋土から17世紀代の土師器小片が出土している。

石室45（図版８・16） 調査区南東部で検出した東西方向にやや長い方形の石室である。掘形規模は東西約1.5ｍ、南北約1.3ｍ、深さ約0.9ｍ、石組の内法は東西約1.0ｍ、南北約0.9ｍである。石材は10～20㎝ほどの川原石の小口面を内側に向け方形に積み上げている。また、壁の背面（裏込め）には石を積み込み補強している。床面は粘質土の地山を平坦にして利用している。埋土から17世紀前半の土器類が出土している。

石室52（図版９） 調査区の北東部で検出した東西方向に長い方形の石室である。遺構の上部は後世の攪乱により失われ、石組は東端部で４段残るが、他は基底部の１段分のみが残存する。掘形規模は東西1.4ｍ以上、南北約1.2ｍ、深さは約0.35ｍ、石組の内法は南北約0.75ｍである。東側は調査区へ延長する。埋土から17世紀前半の土師器小片が出土している。

石室55（図版９） 調査区の東部南端で検出した方形の石室である。北部は石室45によって削平される。掘形規模は東西約1.3ｍ、南北0.6ｍ以上、深さ約0.25ｍ、石組の内法は東西約0.8ｍ、南北0.3ｍ以上である。遺物は土器が細片のみの出土で、詳細な時期は不明である。

石室68（図版９） 調査区の南東隅で検出した方形の石室である。掘形規模は東西約1.5ｍ、南北約1.2ｍ以上、深さ約0.6ｍ、石組は基底部の１～２段のみが残存する。南側は調査区外へ延長する。埋土から16世紀後半の土器類が出土している。

石室71（図版９・16） 調査区の北西部で検出した方形の石室である。掘形規模は東西約1.2ｍ、南北約1.5ｍ、深さ約0.8ｍ、石組の内法は東西約0.75ｍ、南北約1.2ｍである。また、南西部には室町時代の土坑72に落とし込まれた景石９が高さ約0.4ｍ露出しており、この景石の上にも石室の壁が構築されている。埋土からは16世紀後半の土器類が出土している。

井戸41（図版６） 調査区南東部で検出した南北に長い楕円形の石組井戸である。掘形規模は東

西約1.2ｍ、南北約1.5ｍ、深さは検出面から約1.8ｍまで掘り下げたが、作業の安全性を考慮して底までは掘り下げていないため不明である。石材は10～25㎝の川原石の小口面を内側に向けて円形に積み上げる。埋土から18世紀代の土器類やガラス製品が出土している。

土坑１　調査区の北部中央で検出した土坑である。規模は東西約2.5ｍ、南北1.8ｍ以上である。北側は調査区外へ延長する。検出面から約1.2ｍまで掘り下げたが、作業の安全性を考慮してこれより下層は未掘である。埋土からは18世紀代の土器類が出土している。

土坑２（図版10）　調査区の北西部で検出した土坑である。規模は東西約1.0ｍ、南北0.7ｍ、深さ約0.3ｍである。埋土の大半は灰である。埋土からは17世紀前半の土器類が出土している。

土坑４　調査区の北西隅で検出した土坑である。規模は東西約0.8ｍ、南北2.0ｍ以上、深さ約0.4ｍである。北側・西側は調査区外に延長する。埋土から18世紀代の土器類の細片が出土した。

土坑14（図版10）　調査区南部中央で検出した土坑である。規模は東西0.8ｍ以上、南北約0.6ｍ、深さ約0.4ｍである。東側は土坑31・32により削平を受けている。埋土には灰が含まれる。埋土からは17世紀後半の土器類が出土している。

土坑23　調査区南西隅で検出した土坑である。規模は東西3.2ｍ以上、南北0.8ｍ以上、深さ約0.8ｍである。南側・西側は調査区外へ延長する。埋土から18世紀代の土器類が出土した。

土坑31　調査区南部中央で検出した土坑である。規模は東西約0.7ｍ、南北約0.4ｍ、深さ約1.3ｍである。埋土からは多量の18世紀代の土器類が出土しており、廃棄土坑であったと考えられる。

土坑32（図版10）　調査区南東部で検出した土坑である。規模は東西約2.4ｍ、南北約1.8ｍである。検出面から約1.6ｍ掘り下げたが、北側の景石８の落下防止など、作業の安全性を考慮してこれより下層は未掘である。埋土から17世紀後半の土器類が出土している。

土坑43　調査区南東隅で検出した土坑である。規模は東西約0.3ｍ、南北0.4ｍ以上、深さ約0.1ｍである。南側は石室39により削平を受ける。埋土には灰が含まれる。遺物は土師器の細片のみが出土しており、詳細な時期は不明である。

土坑67（図版10）　調査区中央東寄りで検出した土坑である。規模は東西約1.5ｍ、南北約1.8ｍ、深さ約0.8ｍである。上層には、約0.8ｍ×0.6ｍの頁岩（もしくは粘板岩）が埋められており、室町殿廃絶後にこの土坑に廃棄された景石の可能性も考えられる。埋土から18世紀の土器類が出土している。

集石土坑11　調査区中央付近で検出した集石土坑である。規模は東西約0.4ｍ、南北約0.3ｍである。石材はチャートやホルンフェルスが大半を占めるが、砂岩・珪岩・花崗岩も含まれる。この土坑も石室である可能性が考えられるが、遺跡が保存されることとなり、周囲に景石が存在していることから、掘下げは行っていない。

註

１）　円磨度は０～１までの数字で表され、０に近いほど角張り、１に近いほど丸みがある。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

遺物は整理箱にして28箱出土した。種類は土器類・瓦類・土製品・ガラス製品・金属製品があり、時代は室町時代から江戸時代までのものが出土している。

（２）土器類

出土した土器類には、土師器・白色土器・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・染付・輸入陶磁器がある。安土桃山時代から江戸時代のものが大半を占め、室町時代のものは少数である。遺構一括出土の資料を中心に報告する。土師器の型式・年代観については平尾政幸氏の研究に拠った[1)]。

室町時代

陸部造成土出土土器（図10、図版17）　１～５は、いずれも土師器の皿Ｓである。口径10.2～11.8㎝、器高2.3～2.4㎝の小型（１・２）、口径14.0～15.0㎝、器高2.3～2.6㎝の中型（３・４）、口径17.0㎝、器高2.2㎝の大型（５）の３つに分けられる。15世紀後半に位置づけられる。

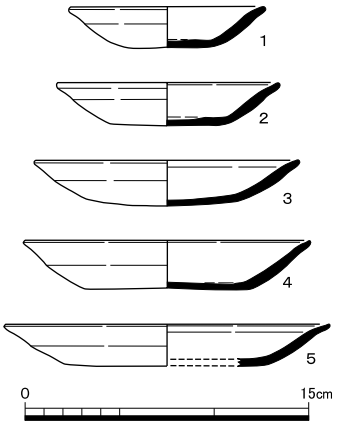


図10　陸部造成土出土土器実測図（１：４）

土坑72出土土器（図11、図版17）　６～25は土師器の皿である。６・７は口径6.0～6.5㎝、器高1.2～1.5㎝の皿Ｎ、８～10は口径8.9～9.2㎝、器高1.9～2.1㎝の皿Sb、11～25は口径9.8～12.0㎝、器高1.8～2.2㎝の皿Ｓである。26～28は土師質のいわゆる丸底小鉢と呼ばれるものである[2)]。内面は、全体に煤が付着して黒色化し、平滑である。外面にはヘラ状工具を縦方向にあてたと思われる痕が残る。また、いずれも二次被熱を受け、28は全体的に表面が剥離している。29は備前産の焼締陶器の擂鉢である。擂目は８条１単位で、各単位の間隔は広い。下方は使用による磨滅で擂目が薄くなる。30～32は輸

表４　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
室町時代	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類		土師器28点、焼締陶器１点、輸入陶磁器３点、瓦類１点		
安土桃山時代～江戸時代	土師器、白色土器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、輸入陶磁器、瓦類、土製品、ガラス製品、金属製品、銭貨		土師器73点、白色土器１点、瓦質土器２点、焼締陶器５点、施釉陶器34点、染付８点、輸入陶磁器１点、瓦類７点、土製品19点、ガラス製品４点、金属製品４点、銭貨６点		
合　計		33箱	197点（５箱）	０箱	28箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より５箱多くなっている。

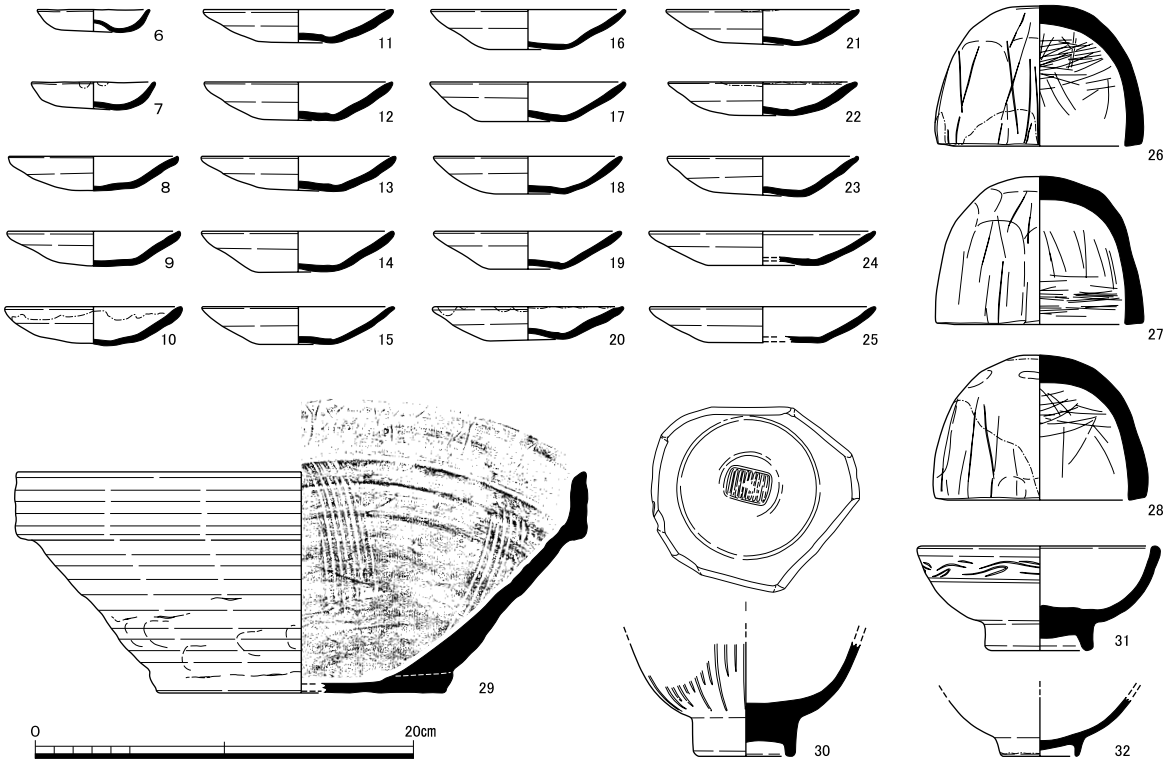


図11　土坑72出土土器実測図（１：４）

入磁器である。30・31は中国産の青磁の椀である。30は見込みに、31は外面に陰刻が施される。32は銹釉の染付椀である。時期は16世紀中頃から後半である。

安土桃山時代から江戸時代

石室71出土土器（図12、図版17）　33～36は土師器の皿Ｓである。33・34は小片であり口径は不明。35・36は口径10.0㎝、器高1.7～1.9㎝である。37・38は瓦質土器である。37は香炉で、体部外面に亀甲文が施される。38は瓦灯である。時期は16世紀後半である。

石室68出土土器（図12）　39は信楽産の焼締陶器の擂鉢である。擂目は６条１単位で、各単位の間隔はやや密である。口縁は外側に延び外反する。時期は16世紀後半である。

石室45出土土器（図12、図版17）　40～49は土師器の皿である。40は口径5.6㎝、器高1.0㎝の皿Ｎ、41・42は口径8.8㎝、器高1.7㎝の皿Sb、43～49は口径11.0～12.8㎝、器高1.7～2.2㎝の皿Ｓである。50は瀬戸産の焼締陶器の灯明皿である。底部は回転糸切り。内面はロクロナデ。時期は16世紀後半である。

土坑２出土土器（図12、図版17）　51～55は肥前産の施釉陶器である。51～53は皿である。削り出し高台で、口縁部がわずかに立ち上がる。51・52には内面に目跡が残る。54・55は椀である。時期は17世紀前半である。

石室37出土土器（図12、図版18）　56～65は土師器の皿である。56は内面に３条１単位の櫛描き文が施される片口皿である。57～59は口径8.3～9.1㎝、器高1.8～2.2㎝の皿Sb、60～65は口径10.3～12.1㎝、器高1.9～2.2㎝の皿Ｓである。66～70は施釉陶器である。66は肥前産の椀、67～70は瀬戸・美濃産である。67は削ぎ皿で、口縁部の屈曲が大きい。68は灰釉の皿である。69は志

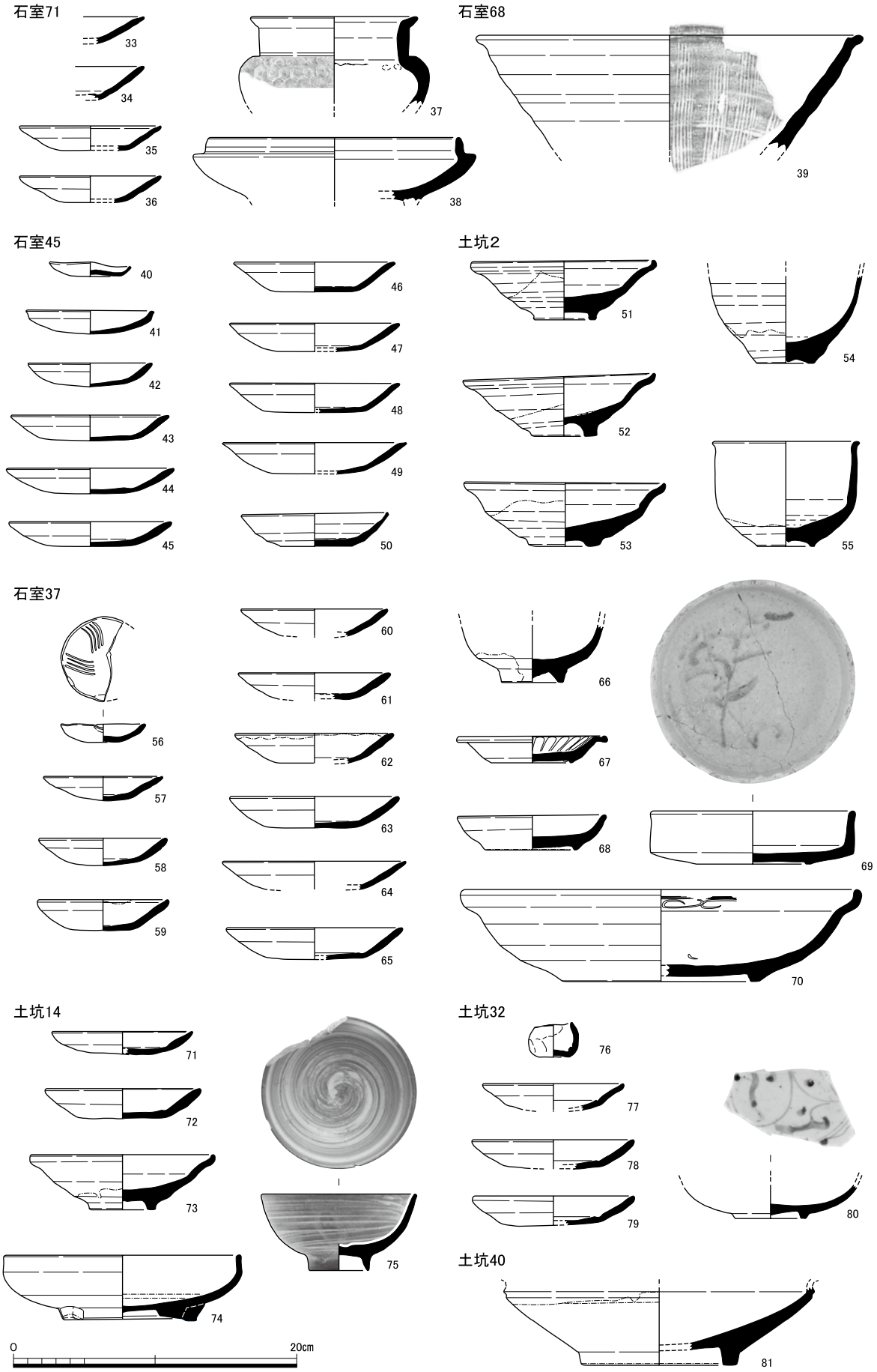


図12　石室37・45・68・71、土坑２・14・32・40出土土器実測図（１：４）

野の鉢である。全体に長石釉が施される。70は大皿である。削り出し高台で、体部外面はケズリ、内面はナデ。口縁部内面に文様が施され、底部内面には工具による沈線が残る。時期は17世紀前半である。

土坑14出土土器（図12）　71・72は土師器の皿である。73～75は肥前産の施釉陶器である。73は皿である。74は香炉である。底部に三足が取り付く。底部内面は蛇の目に釉剥ぎされる。75は刷毛目椀である。時期は17世紀後半である。

土坑32出土土器（図12）　76は土師器の小壷、いわゆるつぼつぼである。77～79は土師器の皿である。口径9.8～11.3㎝、器高1.9～2.2㎝の皿Ｓである。底部内面の圏線が明瞭。80は肥前産の染付皿である。時期は17世紀後半である。

土坑40出土土器（図12）　81は肥前産の施釉陶器の二彩皿である。削り出し高台。口縁部が欠損する。器形は、体部から口縁部にかけての立ち上がりが内側にやや屈曲し外側に開く段皿だと考えられる。時期は17世紀後半である。

土坑１出土土器（図13、図版18）　82～94は土師器の皿である。82～87は口径4.8～5.6㎝、器高1.1～1.4㎝の皿Ｎで、82は底部中央に穿孔がある。86は底部内面に爪による圧痕が環状にめぐる。88・89は口径8.0㎝、器高1.7～1.9㎝の皿Sb、90～94は口径9.5～12.0㎝、器高1.7～2.0㎝の皿Ｓである。底部内面の圏線が明瞭である。95は焼塩壷の身である。96は灯明皿である。97・98は土師質の鉢である。97は底部内面に墨書で轡様の文様が描かれる。99～111は施釉陶器である。99～106は肥前産の椀である。すべて削り出し高台。100～105は刷毛目椀である。107～109は瀬戸・美濃産である。107は皿で、いわゆる復興織部と呼ばれるものである。108は鉢である。全体に灰釉が施される。109は椀である。体部外面には鉄釉が施される。110・111は京焼である。110は椀、111は片口鉢である。112は信楽産の焼締陶器で片口がつく擂鉢である。内面全体に擂目が残る。底面に７条１単位の擂目が交差して施される。113～116は肥前産の染付である。113・114は猪口である。115は椀で、体部と高台内側に文様が描かれる。116は輪花皿である。117は輸入染付の合子で中国産である。平面形は楕円形を呈し、中央に仕切りが設けられる。時期は18世紀前半から中頃である。

土坑31出土土器（図14）　118～123は土師器の皿である。118は口径8.7㎝、器高1.7㎝の皿Sb、119～123は口径10.2～12.4㎝、器高1.9～2.1㎝の皿Ｓである。124は肥前産の施釉陶器の香炉である。時期は18世紀前半である。

石室５出土土器（図14）　125～129は土師器の皿である。口径9.4～12.7㎝、器高1.7～2.0㎝。126・129は口縁部に煤が付着する。130は焼塩壷の身である。体部外面には「泉湊伊織」の刻印が施される。131は京焼の施釉陶器の椀である。132は肥前産の染付の皿である。時期は18世紀中頃である。

石室35出土土器（図14）　133～135は土師器の皿である。133は口径5.5㎝、器高1.1㎝の皿Ｎ、134・135は口径11.2㎝、器高1.7～1.8㎝の皿Ｓである。底部内面の圏線が明瞭。136は白色土器の皿である。137は施釉陶器の蓋である。内側につまみが付く。138は施釉陶器の植木鉢である。139

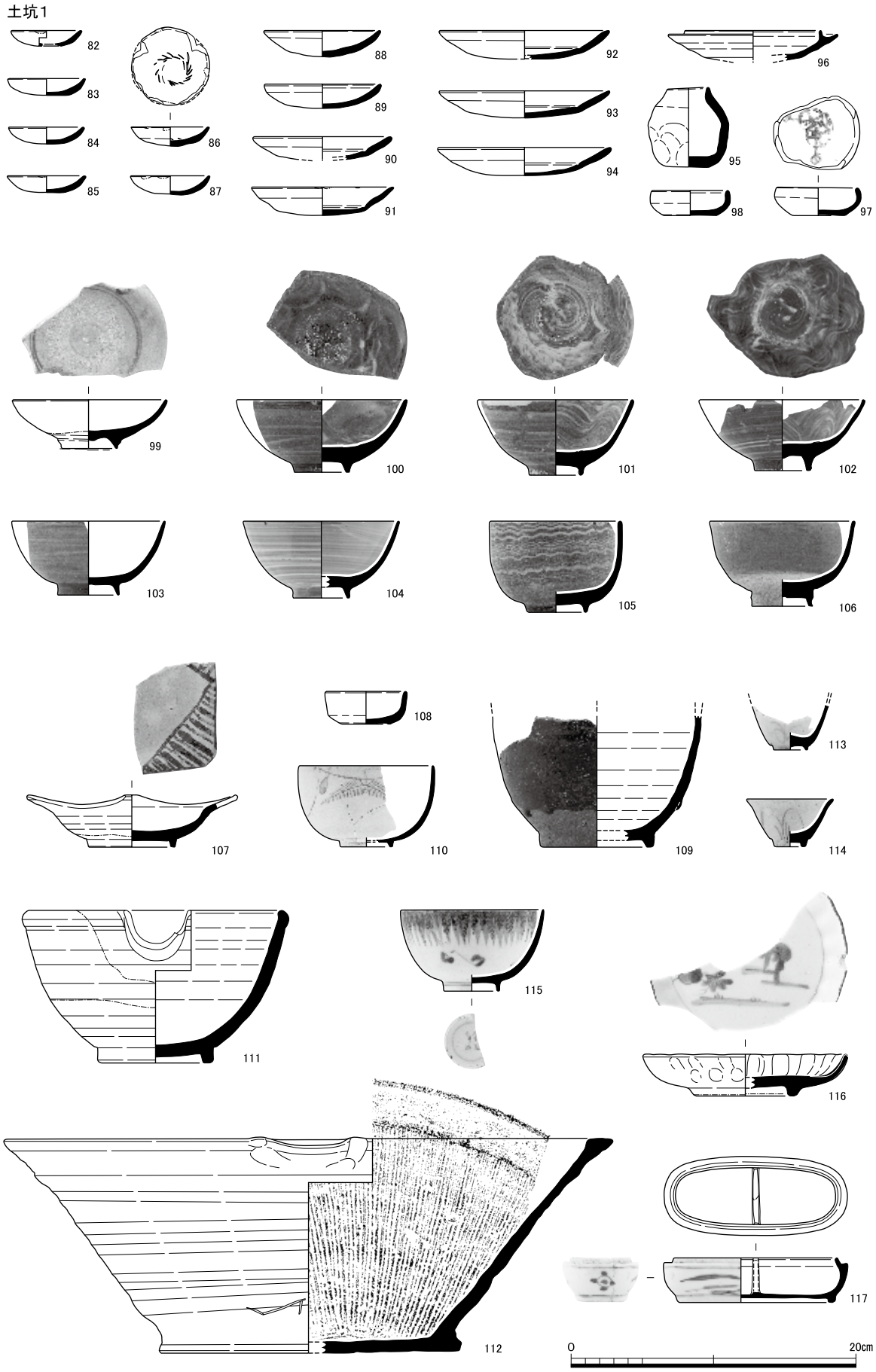


図13　土坑１出土土器実測図（１：４）

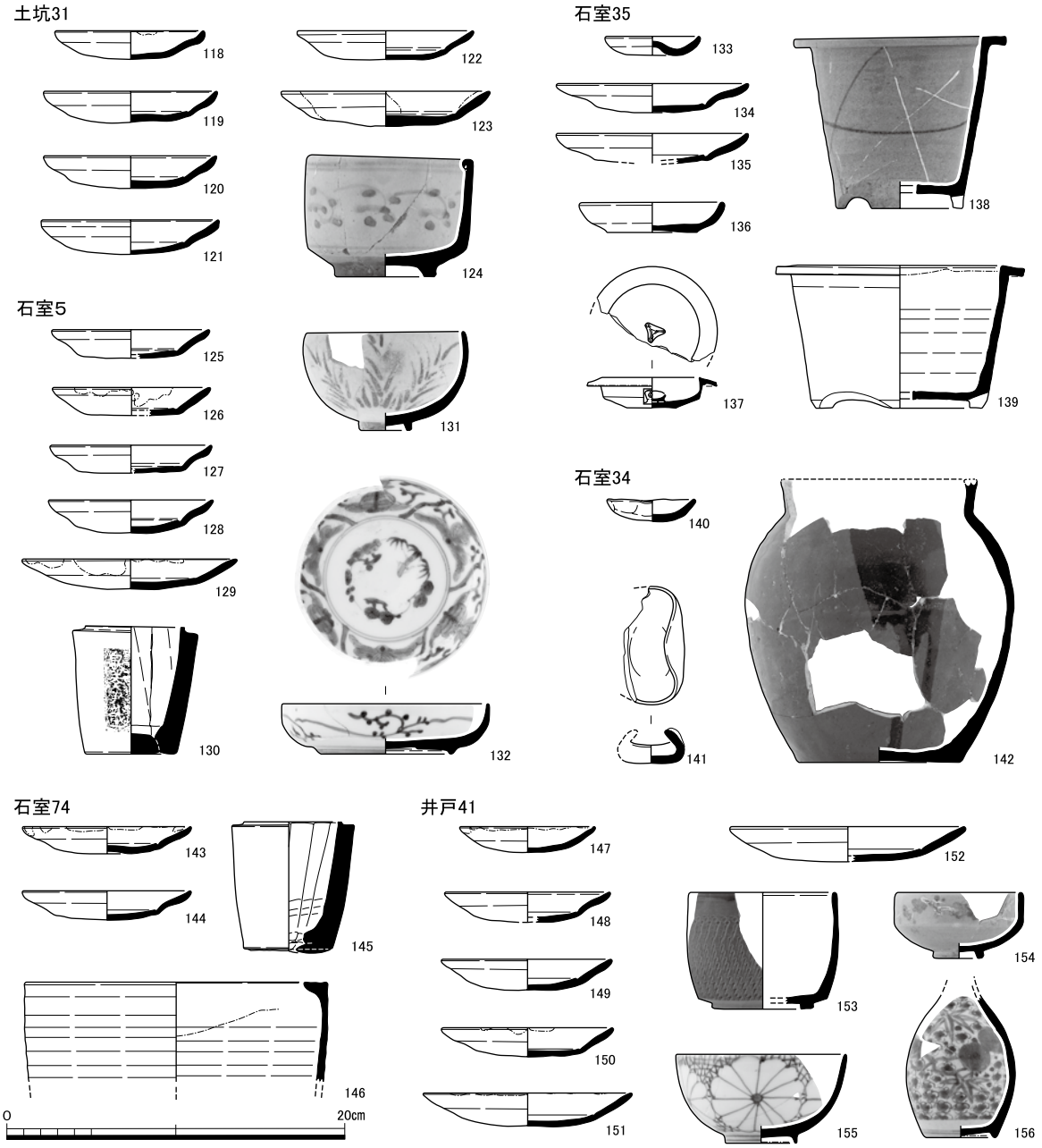


図14　土坑31、石室５・34・35・74、井戸41出土土器実測図（１：４）

は焼締陶器の植木鉢である。138・139ともに高台にＵ字形の抉りを３箇所設け、口縁部は断面Ｌ字形に成形する。底部中央に排水溝が開いている。時期は18世紀中頃である。

石室34出土土器（図14）　140は土師器の皿Ｎである。口径5.2㎝、器高1.0㎝。141は土師器の耳皿である。142は信楽産の焼締陶器の壷である。時期は18世紀中頃である。

石室74出土土器（図14、図版18）　143・144は土師器の皿である。口径10.0㎝、器高1.6～1.8㎝の皿Ｓである。底部内面の圏線が明瞭。143は口縁部に煤が付着する。145は焼塩壷の身である。146は施釉陶器の鉢である。時期は18世紀中頃である。

井戸41出土土器（図14、図版18）　147～152は土師器の皿である。147は口径7.9㎝、器高1.5㎝の皿Sb、148～152は口径9.7～13.8㎝、器高1.8～2.1㎝の皿Ｓである。148～152は底部内面の

圏線が明瞭。147・150は口縁部に煤が付着する。153・154は京焼の施釉陶器の椀である。153は外面には飛鉋によって文様が施される。155・156は肥前産の染付である。155は椀で、外面に文様が描かれる。156は徳利もしくは花瓶と考えられる。時期は18世紀後半である。

（３）瓦類（図15）

軒瓦類は８点出土した。瓦１・２は軒丸瓦、瓦３は菊丸瓦、瓦４～８は軒平瓦である。

軒丸瓦

瓦１は右巻三巴文軒丸瓦である。外区に珠文を配する。巴の頭と尾は互いに離れる。顎部ヨコナデ。胎土は密で、径４㎜以下の石英・チャート・雲母、径２㎝の礫を含む。石室39から出土した。江戸時代。

瓦２は右巻巴文軒丸瓦である。外区に珠文を配する。巴の尾は接し圏線をなす。顎部ヨコナデ。胎土は密で、径４㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含む。土坑31から出土した。江戸時代。

菊丸瓦

瓦３は単弁８葉菊丸瓦である。顎部下端ヨコナデ。瓦当面にはキラ粉が付着する。胎土は密で、径４㎜以下の長石・石英・チャート、径0.8～1.3㎝の礫を含む。土坑31から出土した。江戸時代。

軒平瓦

瓦４は唐草文軒平瓦である。瓦当部凹面には布目が残る。顎部ヨコナデ。胎土は密で、径1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含む。石室71から出土した。室町時代。

瓦５は唐草文軒平瓦である。瓦当部と平瓦部の接合部にカキヤブリが見られる。顎部ケズリ後ヨコナデ。胎土は密で、径５㎜以下の長石・石英・チャートを含む。土坑31から出土した。江戸時代。

瓦６は唐草文軒平瓦である。中心飾りは葉形で、外縁部の角は面取りする。平瓦部凹面は横方向

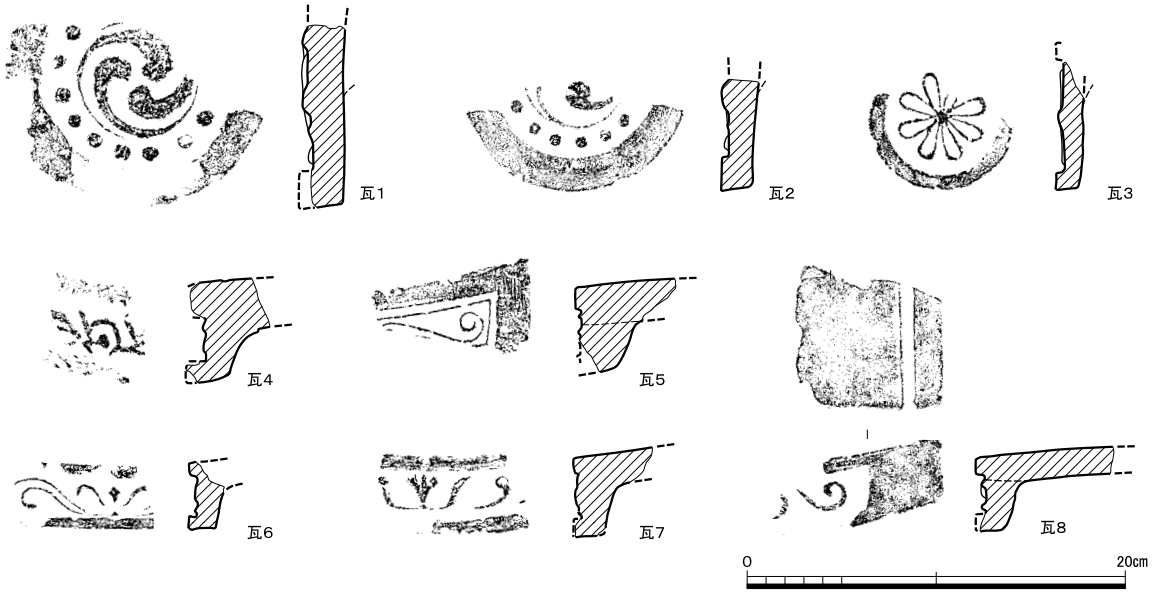


図15　瓦類拓影及び実測図（１：４）

ナデ。瓦当面にはキラ粉が付着する。胎土は密で、径２㎜以下の長石・石英・チャートを含む。土坑31から出土した。江戸時代。

瓦７は唐草文軒平瓦である。中心飾りは葉形で、顎部ヨコナデ、裏面の屈曲部には貼り付け時のナデ。瓦当面にはキラ粉が付着する。胎土は密で、径３㎜以下の長石・石英・チャートを含む。土坑31から出土した。江戸時代。

瓦８は唐草文軒平瓦である。瓦当部と平瓦部の接合部にカキヤブリが見られる。外縁部の角を面取りする。瓦当部の脇区の幅が広い。平瓦部凹面に縦方向の溝がつく。瓦当面にはキラ粉が付着する。胎土は密で、径３㎜以下の長石・石英・チャートを含む。石室34から出土した。江戸時代。

（４）土製品（図16、図版18、表５）

土製品は19点出土した。そのうち土１～17は石室35から出土した。

土１～13は泥面子である。土１は上面に墨が付着し、裏面には墨書されるが判読不能。個別の詳細については表５に記載した。

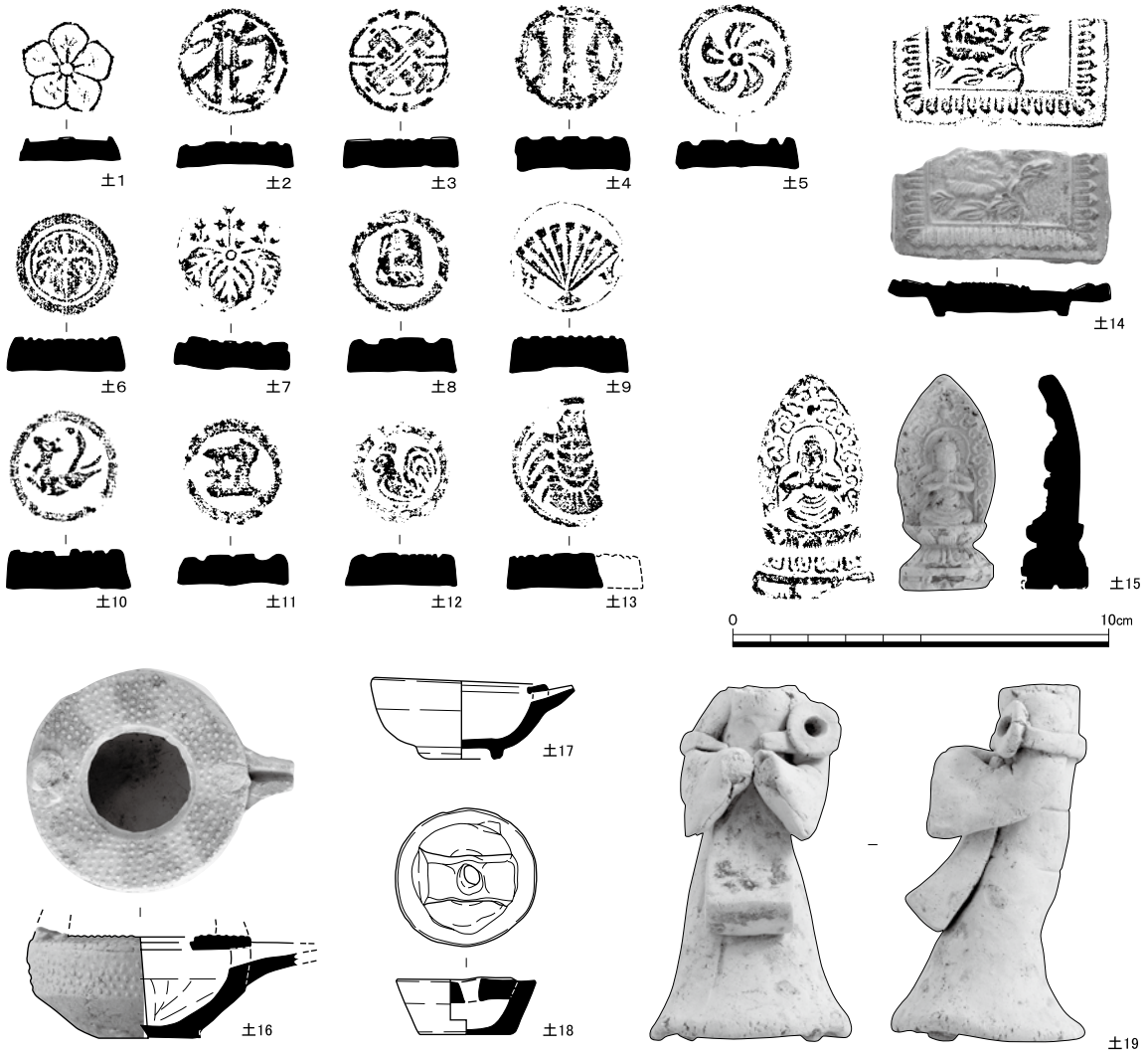


図16　土製品拓影及び実測図（１：２）

表５　泥面子一覧表

番号	文様	縦(cm)	横(cm)	高さ(cm)	備考
土1	家紋「陰桔梗」	2.8	2.8	0.6	上面に墨付着、裏面に墨書
土2	文字「柏」	3.0	3.1	0.7	
土3	家紋「筒守」	3.1	3.1	0.8	
土4	家紋「丸に川」	3.1	3.1	0.9	
土5	家紋「捻じ梅」か	3.2	3.3	0.9	
土6	家紋「丸に蔦」か	3.0	3.2	0.9	
土7	家紋「五三桐」	3.2	3.0	0.9	
土8	駒「桂馬」	2.9	2.9	0.9	
土9	家紋「檜扇」	3.0	3.2	1.0	
土10	「キツネ」	3.3	3.3	1.0	
土11	文字「丑」か	3.0	3.0	0.8	
土12	「ニワトリ」	3.1	3.0	0.9	
土13	「エビ」	3.7	(2.7)	1.0	

土14はミニチュアの額縁入り絵皿である。型押しによる成形で、牡丹の図柄である。表面全体に釉薬が施され、裏面には「九月十一日」の墨書がある。

土15は小型の仏像である。型押しによる成形である。高さ5.7㎝。

土16は注口がつくミニチュアの片口で、口縁部上面には放射状に釉薬が施される。把手は欠損する。体部上半から口縁部にかけて無数の突起が型押しにより成形される。

土17は注口がつくミニチュアの片口鉢である。注口は貼り付けられ、細い棒状の工具により穿孔される。

土18は灯火具である。浅黄色の釉薬が施される。石室５から出土した。

土19は伏見人形である。虚無僧の胴体で頭部は欠損する。井戸41から出土した。

（５）ガラス製品（図17～19）

ガラス製品は、石室37・井戸41から出土した。

ガ１はガラス小玉である。外径約４㎜、厚さ約2.5㎜、紐通し孔の径約１㎜、重さ0.074ｇである。色調は黄緑色を呈する。製作は巻き付け法によるものとみられる。石室37から出土した。

ガ２はガラス管である。外径約5.5㎜、内径約４㎜、残存長81㎜である。一方は破損しており、他の一方は絞り込んで丸く収め中央に0.05㎜ほどの細かい孔があく。透明ガラスを用いているが、全体に乳白色の汚れが付着している。井戸41から出土した。

ガ３・４はガラス板片である。黄色のガ３と緑色のガ４の２種がある。いずれも0.03㎜ほどの薄いもので、わずかに曲面を持っている。玩具ポッペンの破片とみられる。ガ３は12片、総量0.811ｇ。ガ４は７片、総量0.354ｇである。いずれも井戸41か

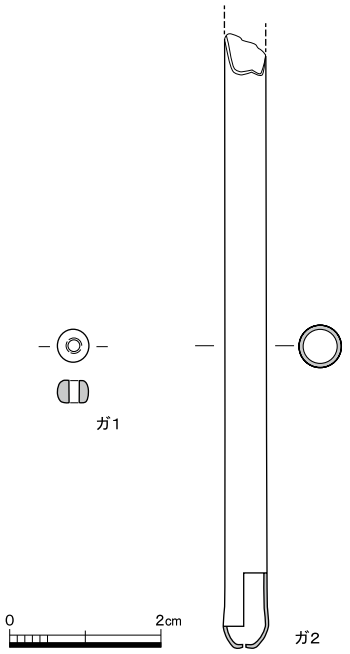


図17　ガラス製品実測図（１：１）

ら出土した。

出土したガラス製品について、可搬型蛍光X線装置（(株)リガクのNiton XL3t-950 S）を使用した成分分析を行った結果、ガ１は黄緑色で銅着色カリ鉛ガラス、ガ２は着色なしカリ鉛ガラス、ガ３は鉄着色カリ鉛ガラス、ガ４は銅着色カリ鉛ガラスであることがわかった。

図18　ガラス小玉（拡大）

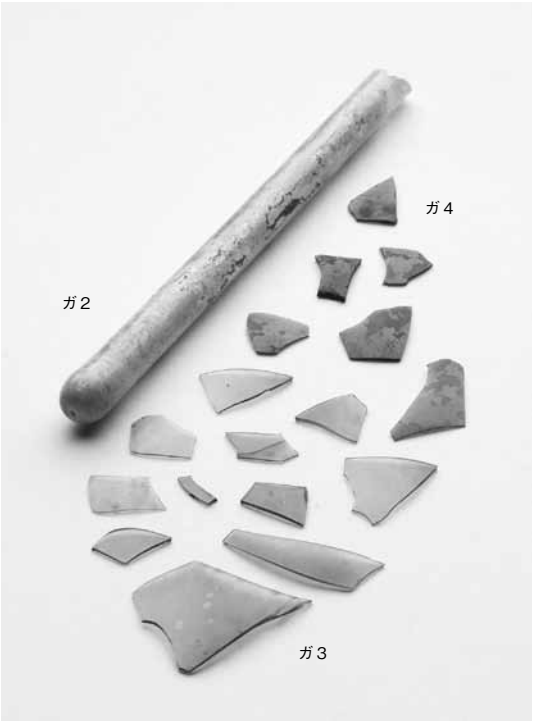


図19　ガラス管・ガラス板片

（６）金属製品・銭貨

金属製品（図20）

金属製品は４点出土した。いずれも煙管である。

金１は煙管の雁首である。長さ4.2㎝、火皿の口径1.4㎝、重さ6.596ｇ。井戸41から出土した。

金２は煙管の雁首である。長さ7.4㎝、火皿の口径1.8㎝、重さ11.896ｇ。接続部に羅宇の竹が残存する。土坑１から出土した。

金３は煙管の雁首である。火皿部分は欠損している。残存長3.4㎝、重さ5.545ｇ。井戸41から出土した。

金４は煙管の吸口である。長さ6.8㎝、重さ3.995ｇ。土坑14から出土した。

銭貨（図21、表６）

銭貨は５種類６枚が出土した。詳細は表６に記載した。

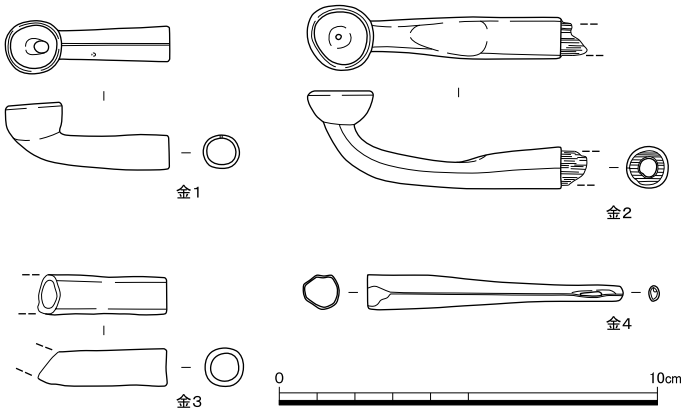


図20　金属製品実測図（１：２）

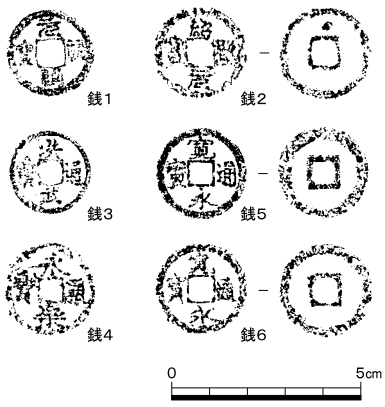


図21　銭貨拓影（１：２）

表６　銭貨一覧表

番号	種類	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	初鋳年	出土遺構
銭1	元祐通寶(篆)	2.4	0.12	3.029	1086	重機掘削
銭2	紹聖元寶(篆)	2.5	0.18	3.145	1094	土坑28
銭3	洪武通寶(鑑銭)	2.2	0.12	2.234	1368	石室5
銭4	永楽通寶	2.6	0.18	2.813	1408	井戸41
銭5	新寛永通寶	2.45	0.12	4.254	1668	第1面検出中
銭6	新寛永通寶	2.5	0.17	3.019	1668	土坑1

註

１）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要 第12号』 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

750年　840年　930年　1020年　1110年　1170年　1260年　1350年　1410年　1500年　1590年　1680年　1740年　1800年　1860年

1			2			3			4			5		6			7			8		9			10			11			12		13		14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

２）　灯明皿の上に口縁部が下になるようにかぶせ、土器内面に油煙を付着させて集めるのに用いられたと考えられる。小森俊寛『丸底小鉢考』リーフレット京都 No.133　財団法人京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

５．まとめ

今回の調査では、室町時代は室町殿の庭園遺構と廃絶後の土坑などを、安土桃山時代から江戸時代は石室や井戸などを検出した。以下で、各時代ごとに今回の調査成果についてまとめる。

（１）室町時代（図22・23、表７）

まず、今回検出した室町殿の庭園遺構について述べる。検出した遺構は、池部76・陸部・滝石組75から構成される。池部76では南岸と東岸を検出し、岸は逆Ｌ字形を呈する。景石は９石を検出し、後世の遺構に落とし込まれた景石９を含め、いずれも一連の石組を構成していたと考えられる。特に景石２～７の６石が互いに立体的に組み合され滝石組75を構成している。滝石組75は北東に面する。石はいずれも１ｍを超え、最大の石材は長辺が2.75ｍにもなる巨大なものである。また、滝石組に用いられている石材は、チャート・頁岩ないし粘板岩・珪岩・ホルンフェルスがあり、質感や色彩にも配慮がなされていたことがうかがえる。さらに、景石を据える際には、石材を安定させるために下部に拳大の礫を敷き詰め地業を行っていることが確認され、極めて手の込んだ施工がなされていたことが明らかとなった。これらのことから、滝石組75は室町殿の庭園の主要景観の１つであると考えられる。

ところで、今回の調査では庭園陸部の造成土から15世紀後半の土器が出土し、庭園の造営時期が判明した。室町殿は、３代将軍足利義満・６代将軍義教・８代将軍義政によって利用されていたことが明らかとなっている[1)]が、出土した土器の年代から、今回検出した庭園遺構は、義政の造成によるものと考えられる。これまでにも周辺では室町殿関連の庭園遺構を数箇所で確認しているが、時期が特定できたのは今回が初めてで、今後室町殿の庭園遺構の展開を考える上で非常に貴重な成果をあげることができた。

周辺での調査例に関しては、これまでに４箇所で庭園遺構を確認している（調査２・５・６・７）。調査２では、南に広がる池の肩口[2)]、調査５では北に広がる池の肩口と景石[3)]、調査６では南に広がる池の肩口と景石を検出している。また、調査７では築山と景石があるが、池は検出していない。いずれの遺構も、時期の詳細は明らかになっていないが、同時併存していたと仮定すれば、調査２は池の北岸、調査５は池の南岸にあたり、南北は約45ｍである。東西に関しては、今回の調査が東岸にあたり、西岸は未確認であるが、調査５の池部までは約60ｍであり東西の規模はこれ以上であると考えられる。室町殿にはおおよそ南北45ｍ、東西60ｍ以上の広大な園池が広がっていたと考えられる。今回検出した庭園遺構はその東端部に位置する。

次に池の水位について考察する。まず、今回の調査区で検出した池底最低部は標高54.2ｍであるが、その部分の堆積土には泥などの水性堆積物は検出されておらず、水がここまで及んでいた痕跡は確認できていない。一方、本調査地の北西に位置する調査６で確認された池底の標高は約53.7ｍ、池岸の標高は55.0ｍで、本調査地の南の調査２では、池底の標高は約53.1ｍ、池岸の標高は54.4ｍである。上述した通り、本調査地の池部76の状況から標高54.2ｍまでは水が及んでいないこ

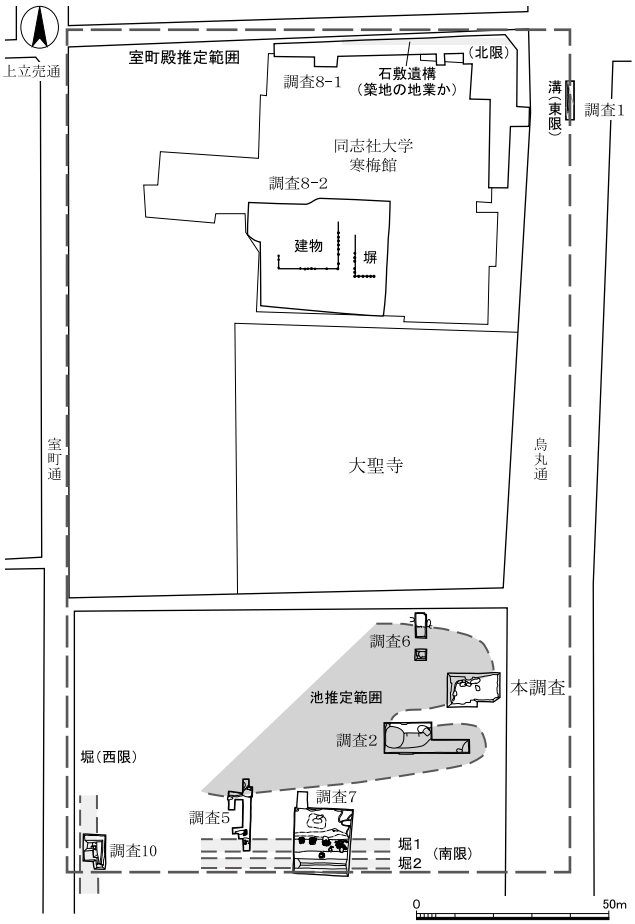


図22　義政期室町殿範囲復元図（1：2,000）

表7　各調査の陸部・池底標高一覧表

	陸部の標高	池底の標高
本調査	54.6m	54.2m
調査2	54.4m	53.1m
調査6	55.0m	53.7m
調査7	54.6m	―

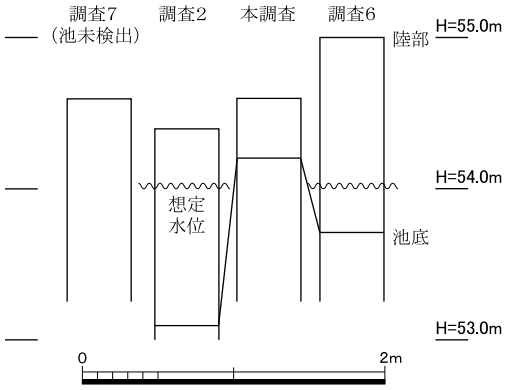


図23　各調査の標高模式柱状図（1：50）

と、調査6には水性堆積があり、池底の標高が53.7ｍであることなどから、池の水位は53.7ｍ以上54.2ｍ未満の範囲内であることがわかる。景石などの状況や池の深さを加味すると、喫水線の標高はおそらく54.0～54.1ｍほどではないかと考えられる。したがって園池の深さは0.3～0.4ｍほどの浅い池であったと推測できる。池の水位からみると、各調査地の園池が同一の池であったとしても矛盾はない。

義政期の室町殿の施設に関しては、文献史料から寝殿・公卿座・殿上・観音殿・会所・小持仏堂・仏護堂・泉殿・泉殿西殿などの建物群と庭園が存在していたことを知ることができる[4)]が、それらの配置については不明な部分が多いものの、北半に建物の空間、南半に庭園の空間があったと推定されている。16世紀中頃に描かれたとされる『上杉本洛中洛外図屏風』には、北側に建物、南側に池や景石・植栽などの庭園空間が描かれている[5)]。室町時代の庭園は、建物の中など定まった視点から観賞するように設計されていた[6)]。今回検出した滝石組75は北東に面を向けていることから、調査地の北側に視点場となる建物があったと推測される。とすれば、現在の大聖寺の位置に施設が存在したと考えられる。北側に建物の空間、南側に庭園空間というこれまでの発掘調査成果は、文献史料や絵画に描かれる姿とも符合する。

また、今回検出した庭園の景石９が落とし込まれた土坑72の埋没時期が16世紀中頃から後半であることから、この頃には庭園は廃絶していたことがわかる。

なお、調査終了後工事の立会調査で、調査区南側から新たに景石２石を検出しており、今回の調査で検出した石組と関連していると考えられ、巨石を多用した庭園の状況がより明らかとなった[7)]。

（２）安土桃山時代から江戸時代

16世紀後半以降では、多数の石室を検出した。平面形は方形のものと円形のものがあり、主に方形のものは16世紀後葉から17世紀前半、円形のものは18世紀代である。また、石室71や石室74でみられたように、室町殿の景石を動かさずに石室を構築している事例も見られた。石室74では、景石８の一部を割り取って石室の壁にしており、室町殿廃絶後も景石の存在に苦心していたと考えられる。

また、今回、土坑２・14・32・43といった灰を埋土に含む土坑を多数検出した。江戸時代の灰の利用法には酒の中和[8)]などさまざまあり、当地で灰買いなどの灰を利用した生業が営まれた可能性も考えられるが、今回それを裏付けられる遺構群や遺物を検出することはできなかった[9)]。この点に関しては、灰土坑やこれに関連する遺構・遺物の事例のさらなる蓄積を期する。

註

１） 高橋康夫「足利義満の「王都」－大規模開発と地域空間形成」『海の「京都」』 京都大学学術出版会 2015年

２） 「No.79」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会　1982年
報告の断面図からは、池は新旧２段階ある可能性が考えられる。そのように考えた場合、旧段階の池底は標高53.1ｍ、新段階の池の標高は53.6ｍである。

３） 調査５の報告では、調査区南端で池の汀を検出したとしているが、調査７の堀１延長線上に位置することから、池ではなく堀と考えられる。北部で検出した落ち込みが池の肩口となる。

４） 川上 貢『日本中世住宅の研究〔新訂〕』 中央公論美術出版　2002年
中村利則『町家の茶室』 淡交社　1981

５） 『上杉本洛中洛外図屏風』描かれる室町殿は、製作時期の景観ではなく、最盛期の情景を描いたという意見もある。
高橋康夫「中世「王都」の解体－上京の地域形成－」『海の「京都」』 京都大学学術出版会　2015年
など

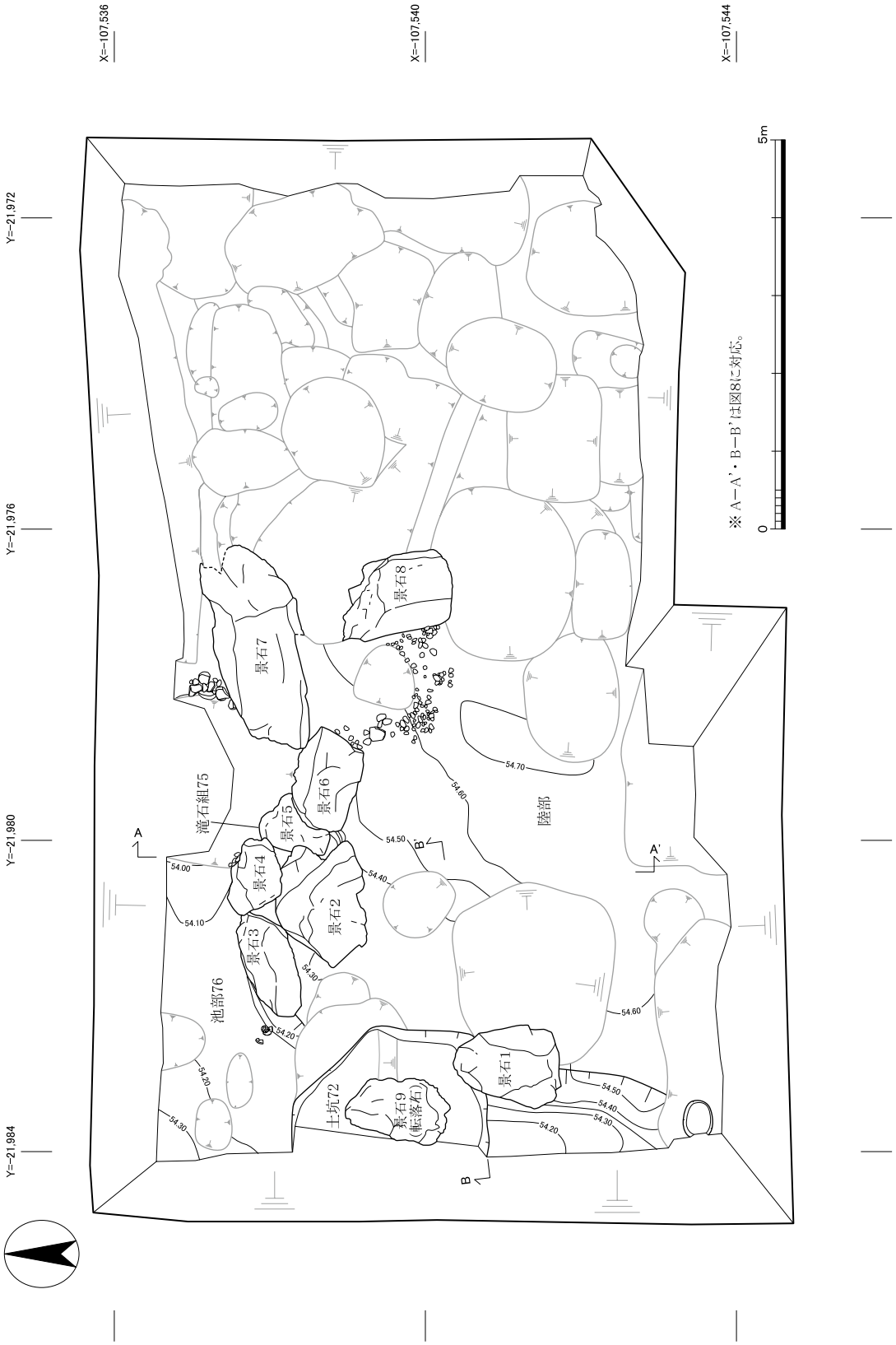
６） 浅野二郎・仲 隆裕・藤井英二郎「書院造庭園に関する研究－その１：初期書院造庭園と会所・泉殿の庭園」『千葉大園学報』第41号　75-83頁　1988年

７） 詳細については『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和２年度』 京都市文化市民局　2020年度末刊行予定を参照のこと。

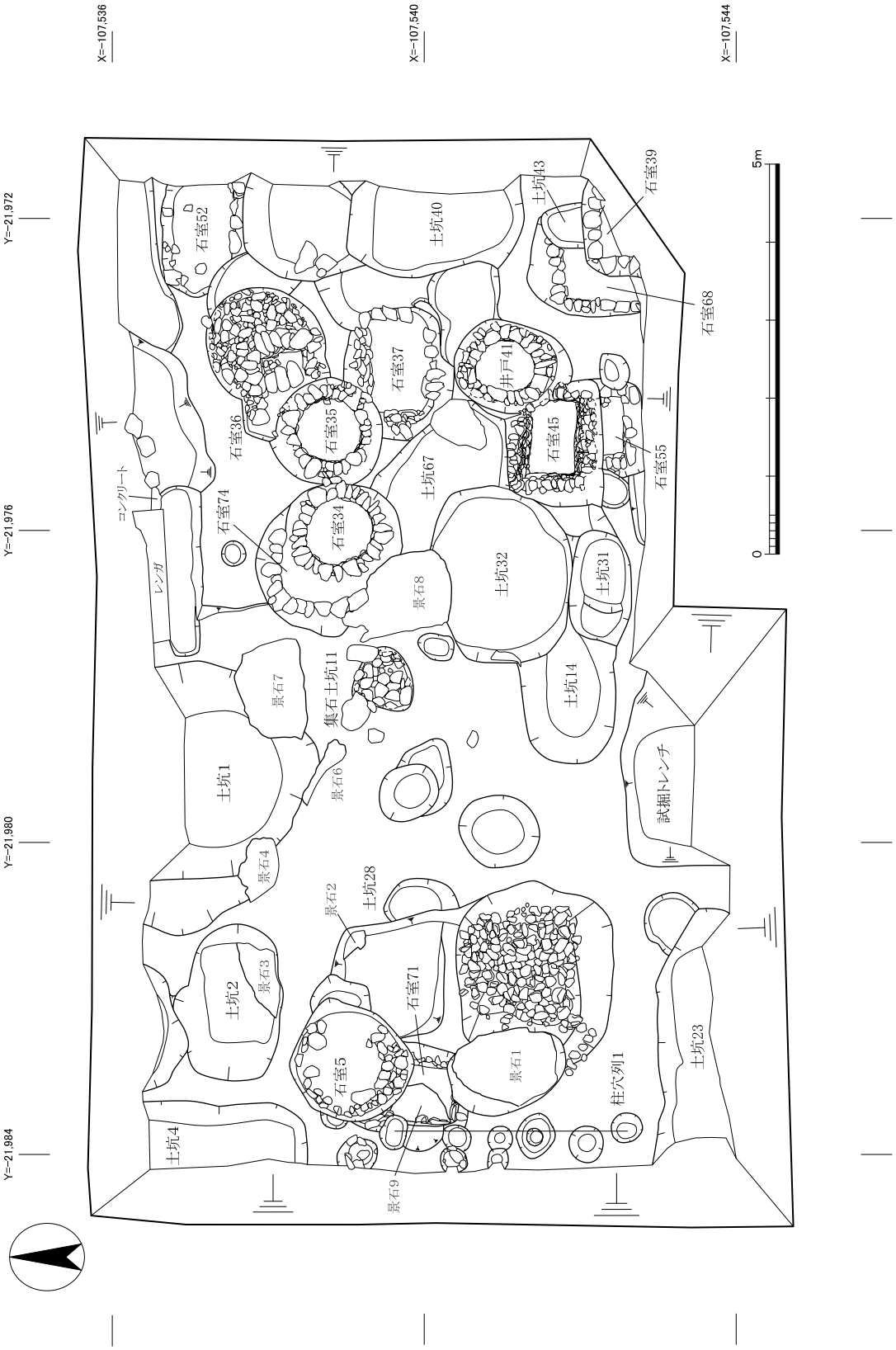
８） 暉峻康隆「上方の酒肴」『日本醸造協會雑誌』68巻３号　141-144頁　1973年
酒の中和以外にも灰の利用法には生糸の精練・藍染時の脱色・田畑の土壌改善などがある。

９） 灰や炭のたまる土坑は、これらを多量に含む排水によるものの可能性が指摘されている。
『平安京左京三条四坊五町跡・烏丸御池遺跡－大阪材木町における埋蔵文化財発掘調査報告書－』イビソク京都市内遺跡調査報告 第22輯　株式会社イビソク　2020年

図　　版

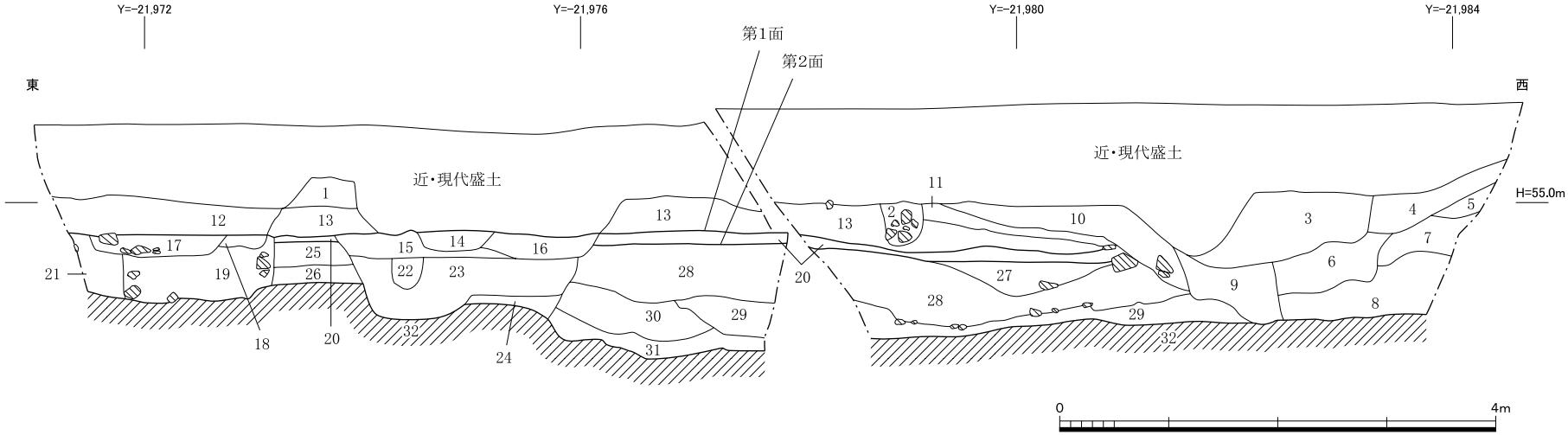


室町時代（第２面）遺構平面図（１：80）



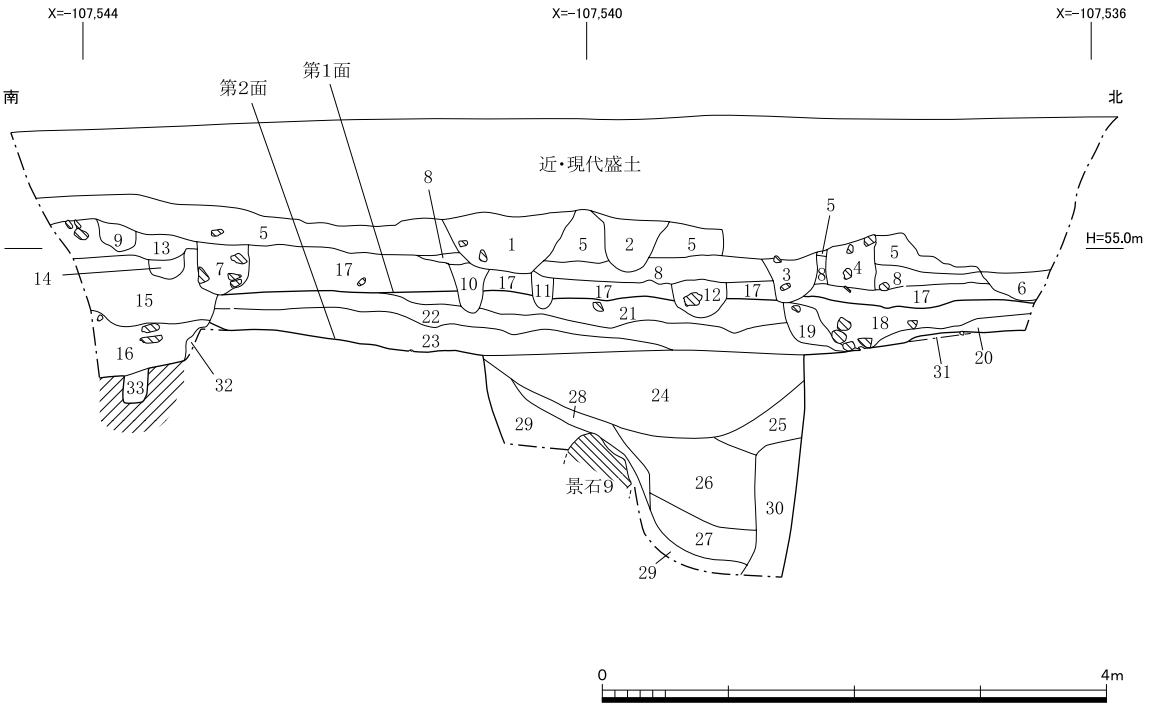
安土桃山時代から江戸時代（第１面）遺構平面図（１：80）

調査区南壁断面図（1：60）



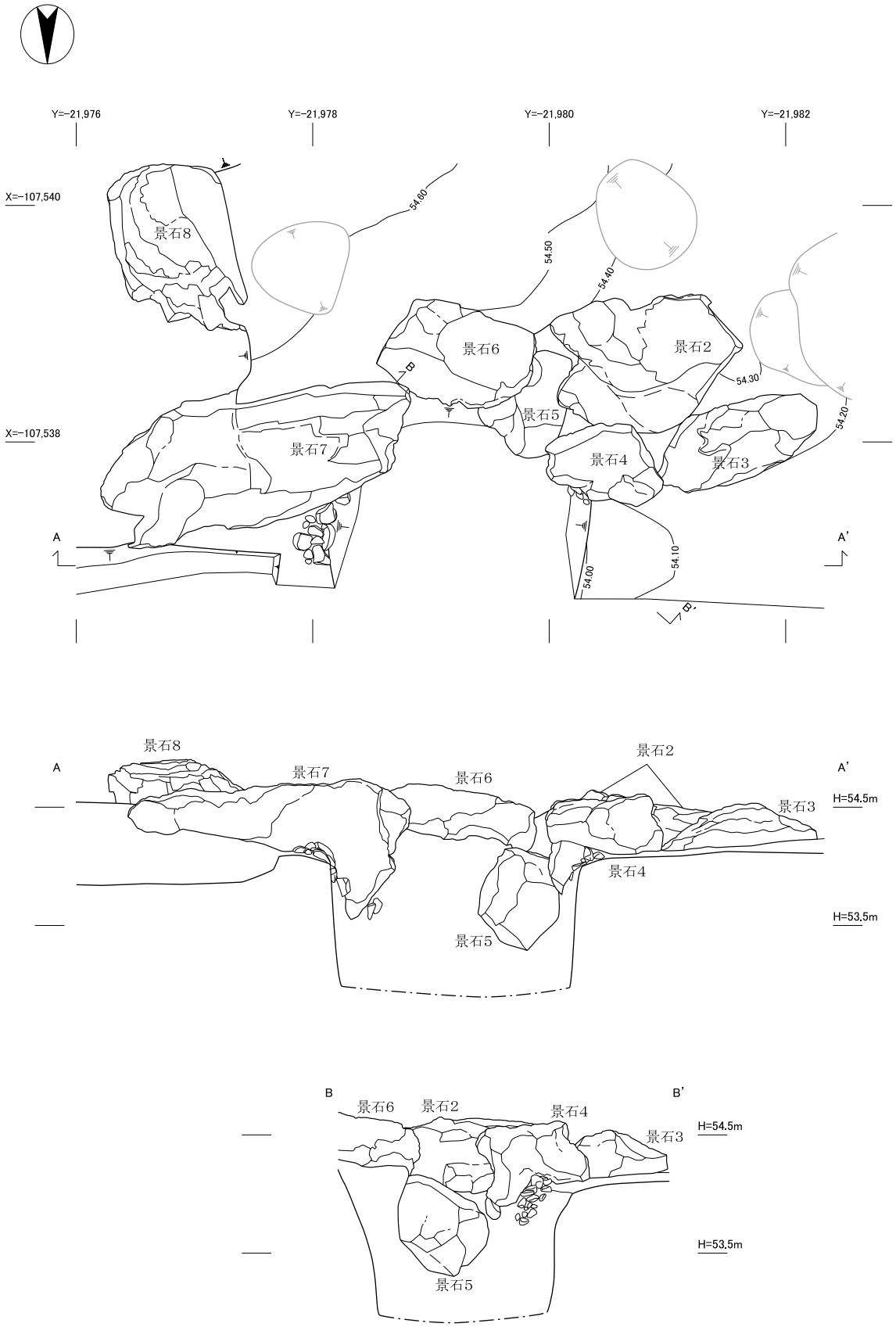
1 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥　炭わずかに混
2 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥　瓦片混、φ15cm程の礫混
3 5YR4/3にぶい赤褐色シルト～細砂
土器片・瓦片・炭中量混、φ3～5cmの礫わずかに混
4 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色砂泥
土器片・炭少量混、φ2～10cmの礫少量混
5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　土器片わずかに混、φ15cm程の礫少量混
6 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粒子粗
土器片・炭わずかに混、φ2～5cmの礫少量混
7 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色砂泥　土器片・炭わずかに混
8 10YR4/4褐色砂泥　土師片・炭わずかに混
9 10YR3/4暗褐色シルト～細砂　土器片・炭少量混、φ10～15cmの礫多量混
10 10YR 4/3にぶい黄褐色砂泥　土器片・炭少量混、φ10～15cmの礫中量混
（土坑23）
11 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥　土器片・炭わずかに混、φ3～5cmの礫少量混
12 10YR4/4褐色砂泥　炭混
13 10YR4/4褐色砂泥　土器片・炭わずかに混、φ3～10cmの礫わずかに混
14 10YR4/2灰黄褐色砂泥　土器片・炭混（石室55）
15 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
16 10YR4/4褐色砂泥 灰ブロック混　炭少量混
17 10YR3/2黒褐色細砂～粗砂　土器片・炭混（石室39）
18 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥　土器片混
19 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　φ10～30cmの礫多量混
（石室68）
20 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥　土器片混、φ5～10cmの礫混（安土桃山時代～江戸時代整地層）
21 10YR4/4褐色砂泥　炭・焼土混（室町時代整地層）
22 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　炭混
23 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥　炭混
24 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細砂
25 10YR4/4褐色シルト～細砂　土器片・炭混
26 10YR3/4暗褐色砂泥
27 10YR3/3暗褐色砂泥　土器片・炭わずかに混、φ5～10cmの礫少量混
28 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥　土器片・炭ごくわずかに混、
φ10～15cmの礫多量混
29 10YR4/2灰黄褐色砂泥　φ5～10cmの礫少量混
30 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥　φ10～15cmの礫多量混
31 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥　土器片混
（室町時代整地層）
32 10YR4/6褐色砂泥　φ5～10cmの礫少量混（地山）

図版3 遺構



1 10YR4/4褐色砂泥 土器片・炭中量混、φ10～15cmの礫中量混
2 10YR3/4暗褐色砂泥 粘質 土器片・炭中量混、φ10cm程の礫少量混
3 10YR3/3～3/4暗褐色砂泥 炭少量混、φ5～10cmの礫中量混
4 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土器片・炭少量混、φ5～10cmの礫少量混
5 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色砂泥 土器片・炭少量混、φ2～10cm程の礫少量混
6 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 炭少量混、φ3～5cmの礫少量混
7 10YR4/4褐色砂泥 土器片・炭中量混、φ10～15cmの礫多量混
8 10YR5/3～5/4にぶい黄褐色砂泥 土器片・炭少量混、φ5～15cmの礫少量混
9 10YR3/3暗褐色砂泥 土器片・炭わずかに混、φ1～2cmの礫少量混
10 10YR4/2灰黄褐色砂泥 土器片・炭わずかに混、φ3～5cmの礫わずかに混（柱穴）
11 10YR3/3暗褐色砂泥 炭混（柱穴）
12 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 土器片・炭わずかに混、φ15cmの礫混（柱穴）
13 10YR3/4暗褐色砂泥 土器片・炭中量混、φ5～10cmの礫少量混
14 10YR4/2灰黄褐色砂泥 土器片・炭少量混、φ2～3cmの礫少量混
15 10YR4/3～5/3にぶい黄褐色砂泥 土器片・炭わずかに混、φ3～5cmの礫少量混
16 10YR4/4褐色砂泥 土器片・炭わずかに混、φ2～15cmの礫少量混
（土坑23）
17 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 微砂混 土器片・炭中量混、φ3～5cmの礫少量混
18 10YR4/2灰黄褐色砂泥 土器片・炭わずかに混、φ10～15cmの礫少量混
19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 炭わずかに混、φ5cmの礫わずかに混
20 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 土器片・炭少量混、φ2～3cmの礫わずかに混
（土坑4）
21 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 土器片混
22 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土器片・炭中量混、φ3～5cmの礫少量混
23 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ2～5cmの礫わずかに混
（安土桃山時代～江戸時代整地層）
24 10YR4/4褐色砂泥
25 10YR3/3暗褐色砂泥 土器片混、φ5～10cmの礫混
26 10YR3/1黒褐色砂泥 φ2～5cmの礫わずかに混
27 10YR3/3黒褐色砂泥
28 10YR3/1暗褐色砂泥
29 10YR2/1黒色砂泥
30 10YR4/2灰黄褐色粗砂 φ2～5cmの礫混
（土坑72）
31 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂 細砂混 白砂混（第2面池部上面）
32 10YR4/6褐色砂泥 粘質 土器片少量混
33 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土器片・炭少量混、φ2～3cmの礫少量混（柱穴）

調査区西壁断面図（1：60）

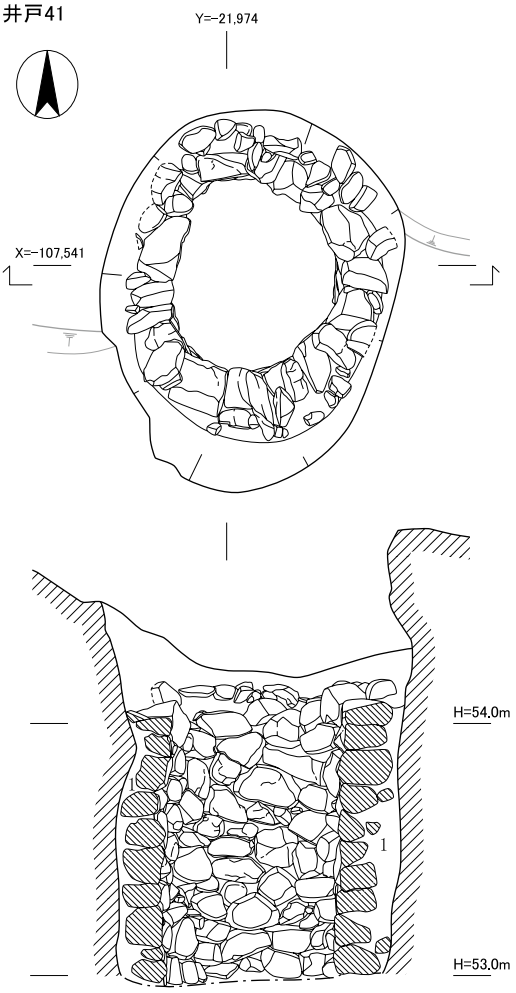


※ A－A'・B－B'は巻頭図版2に対応。

0 2m

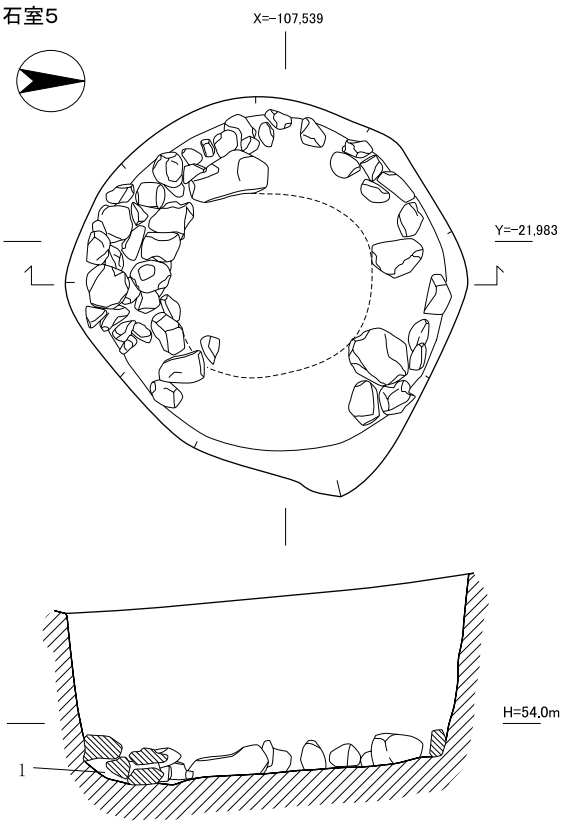
滝石組75実測図（1：50）

井戸41



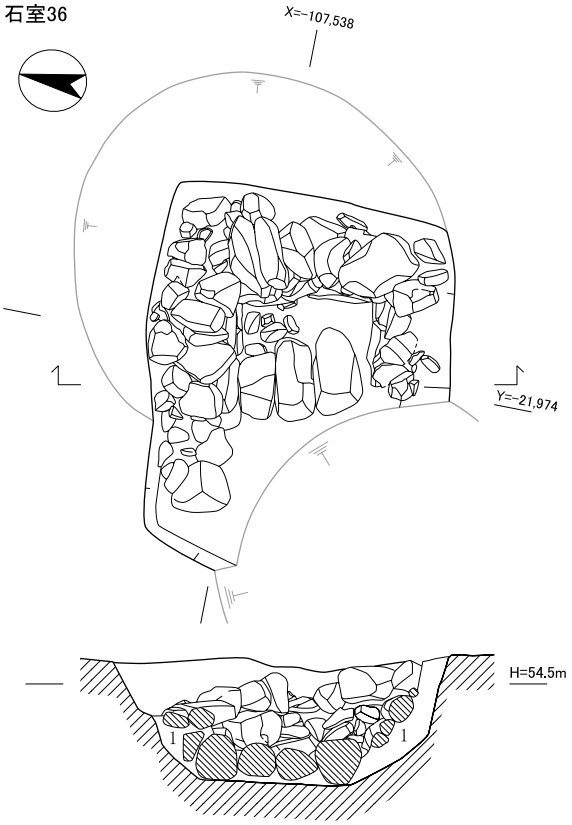
1 10YR3/4暗褐色砂泥 粘性あり 炭少量混（掘形）

石室5



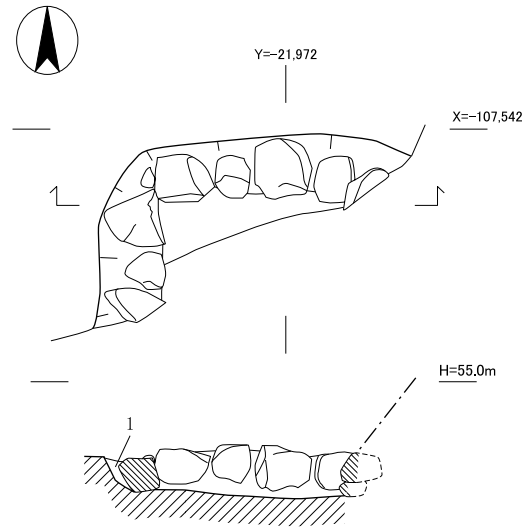
1 7.5YR4/3褐色シルト～細砂 炭化物・焼土多量混（掘形）

石室36



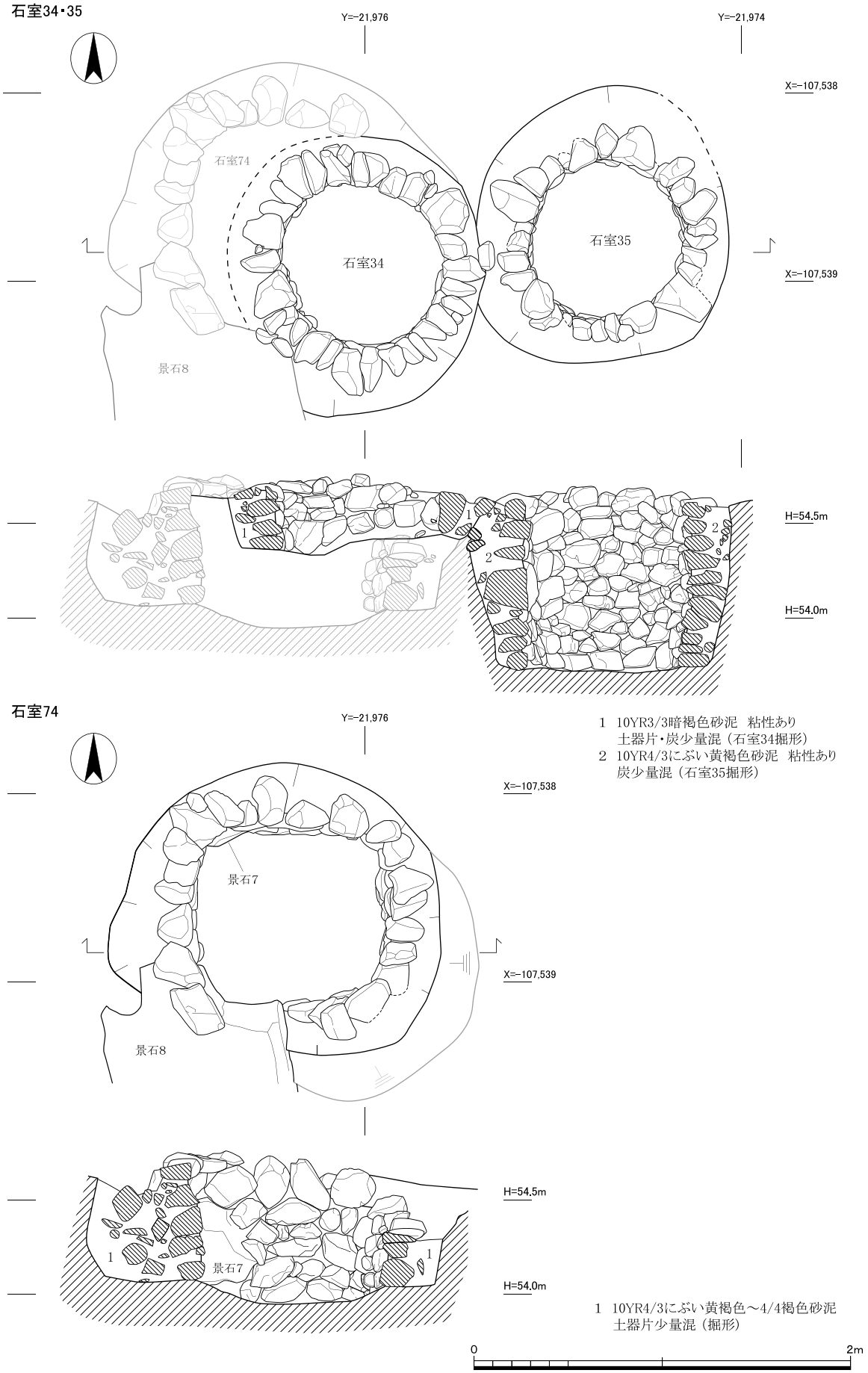
1 7.5YR4/3褐色砂泥 炭わずかに混（掘形）

石室39



1 10YR3/2黒褐色砂泥 土師器片少量混（掘形）

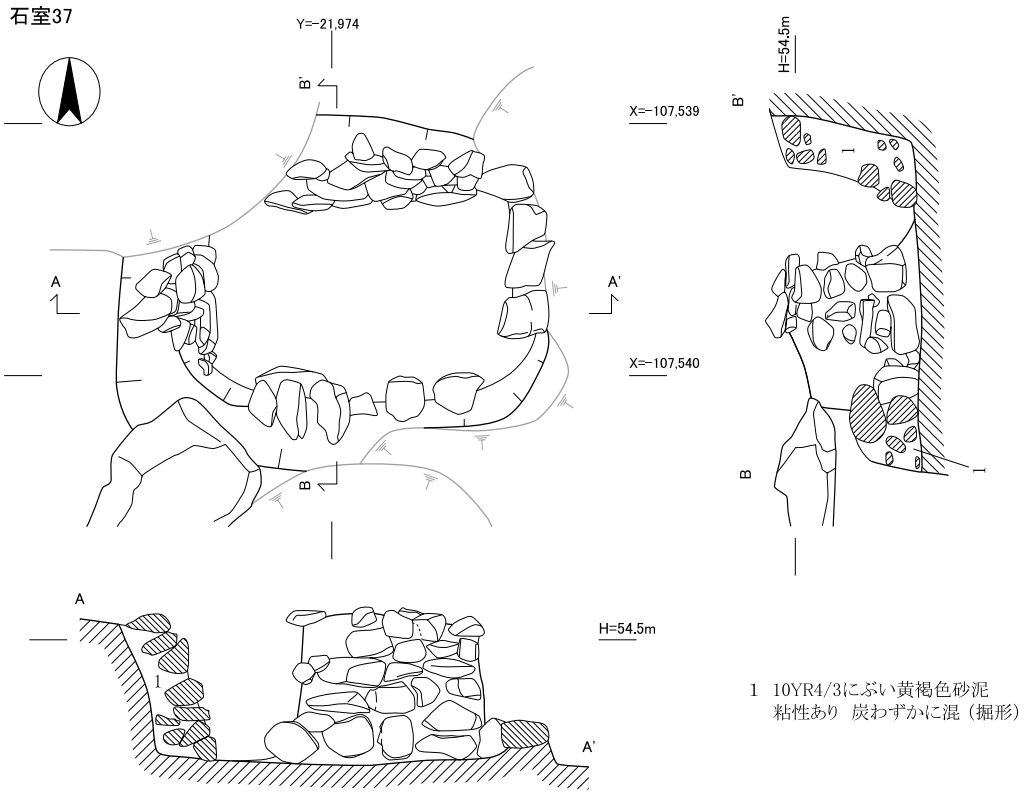
井戸41、石室５・36・39実測図（１：30）

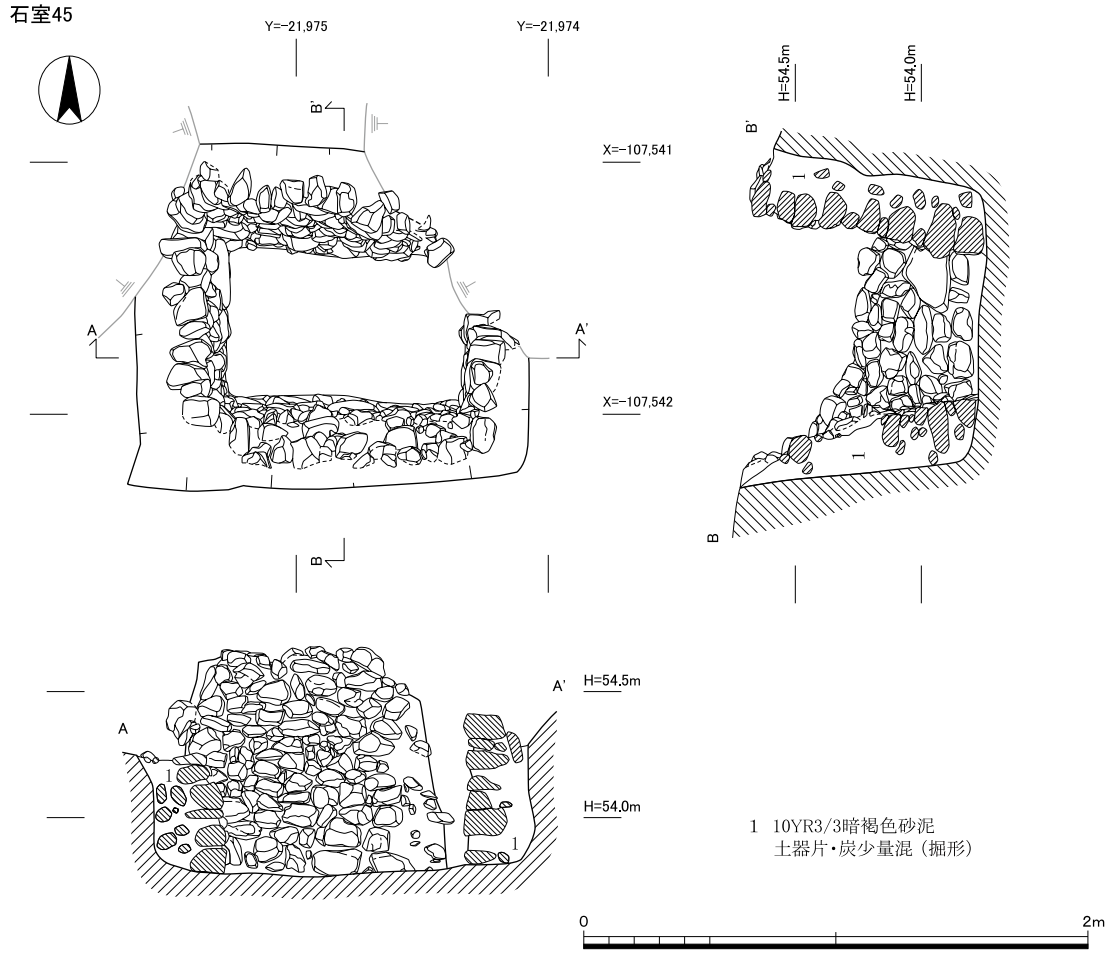


1 10YR3/3暗褐色砂泥 粘性あり
土器片・炭少量混（石室34掘形）
2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 粘性あり
炭少量混（石室35掘形）

1 10YR4/3にぶい黄褐色～4/4褐色砂泥
土器片少量混（掘形）

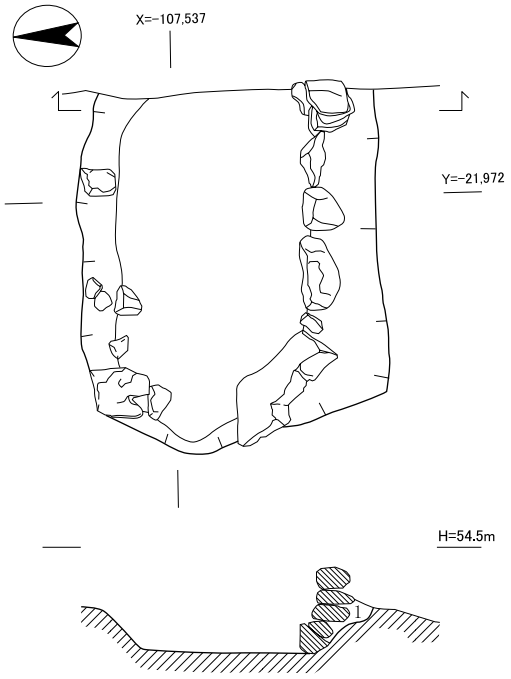
石室34・35・74実測図（1：30）





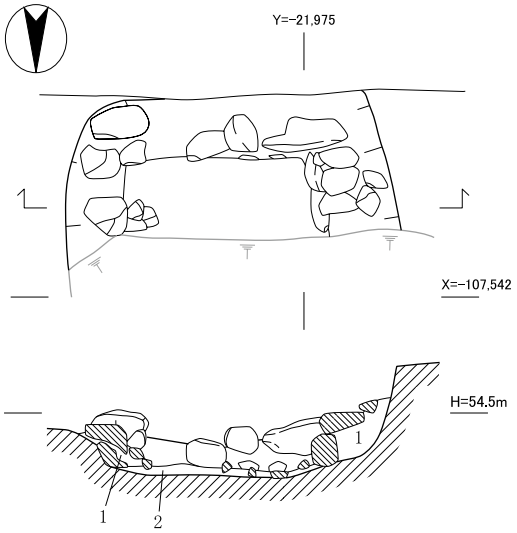
石室37・45実測図（1：30）

石室52



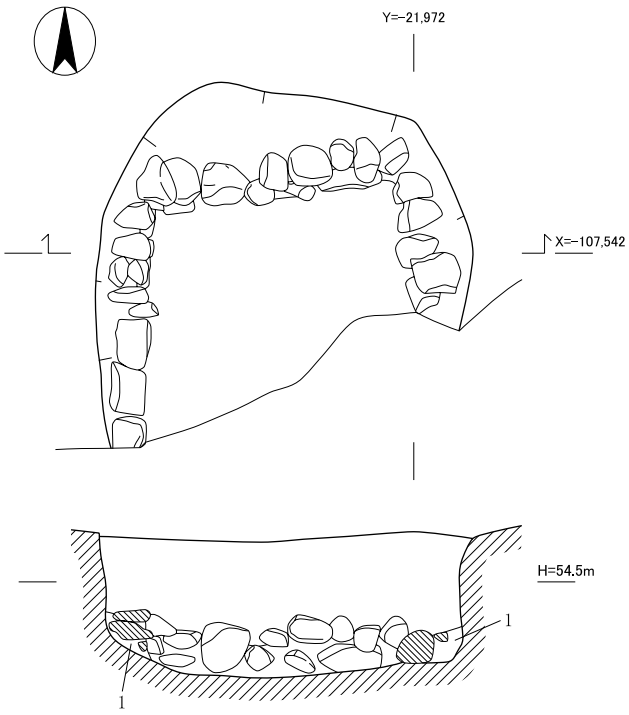
1　10YR3/3暗褐色砂泥　炭混（掘形）

石室55



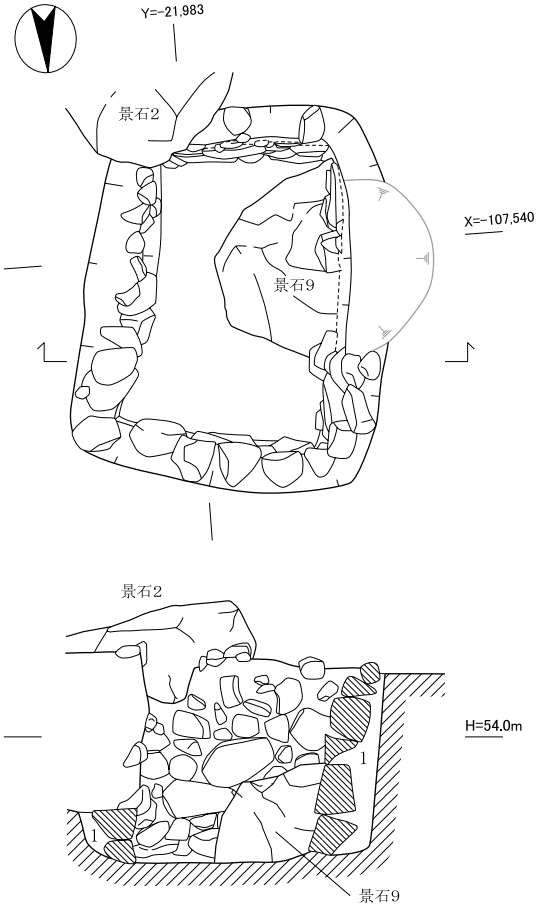
1　10YR3/4暗褐色砂泥　炭わずかに混（掘形）
2　2.5Y3/2黒褐色砂泥　土師器片・炭少量混（掘形）

石室68



1　10YR3/2黒褐色砂泥（掘形）

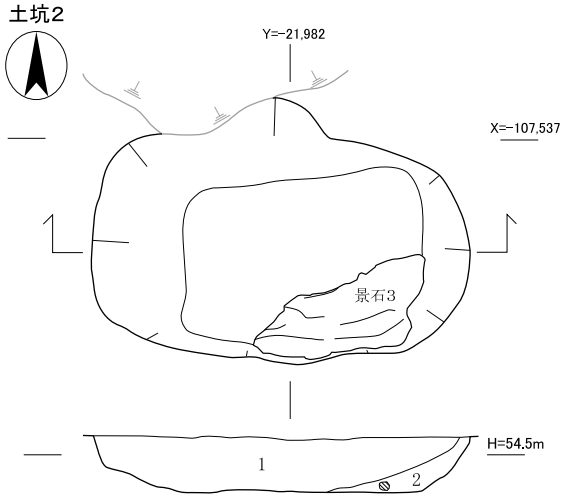
石室71



1　10YR4/2灰黄褐色砂泥　炭・土師器片混（掘形）

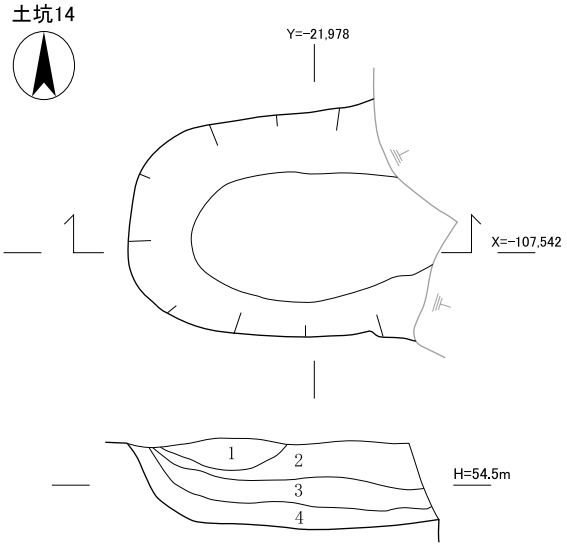
石室52・55・68・71実測図（1：30）

土坑2



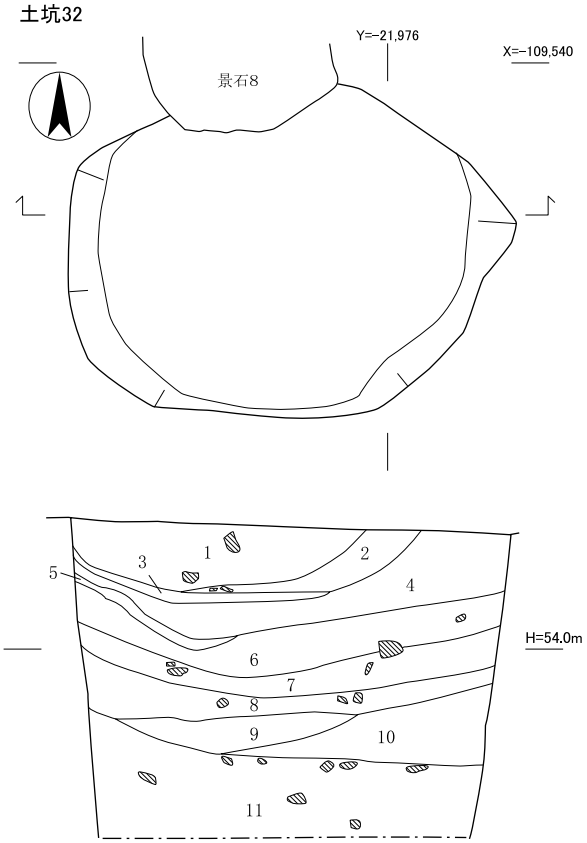
1 7.5YR4/6褐色灰
2 10YR4/2灰黄褐色砂泥

土坑14



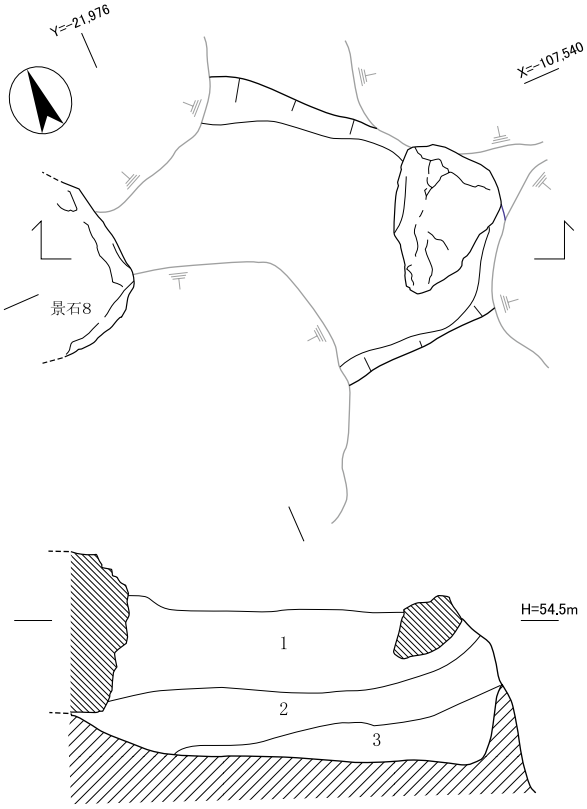
1 7.5YR6/4にぶい橙色灰 炭混
2 7.5YR4/2灰褐色シルト～細砂 染付片混
φ3～5cmの礫少量混
3 7.5YR7/4にぶい橙色砂泥 灰・炭混
4 10YR5/3にぶい褐色シルト 炭混

土坑32



1 10YR4/4褐色砂泥 φ10～15cmの礫少量混
2 10YR3/2黒褐色砂泥 φ5～10cmの礫少量混
3 10YR8/2灰白色灰
4 10YR5/6黄褐色砂泥 土師器片混
5 10YR8/3浅黄色灰
6 10YR6/4にぶい黄橙色シルトに
10YR7/3にぶい黄橙色灰ブロック混
7 2.5Y6/6明黄褐色砂泥
8 10YR3/2黒褐色砂泥に2.5Y6/2灰黄色灰ブロック混
土師器片、φ10cmの礫少量混
9 7.5Y4/6褐色灰
10 10YR4/2灰黄褐色砂泥
11 10YR4/4褐色砂泥 土師器片混

土坑67



1 10YR4/2灰黄褐色砂泥 土器片混
2 10YR5/2～5/3にぶい黄褐色砂泥 炭混
3 10YR4/4褐色砂泥 炭混

0 2m

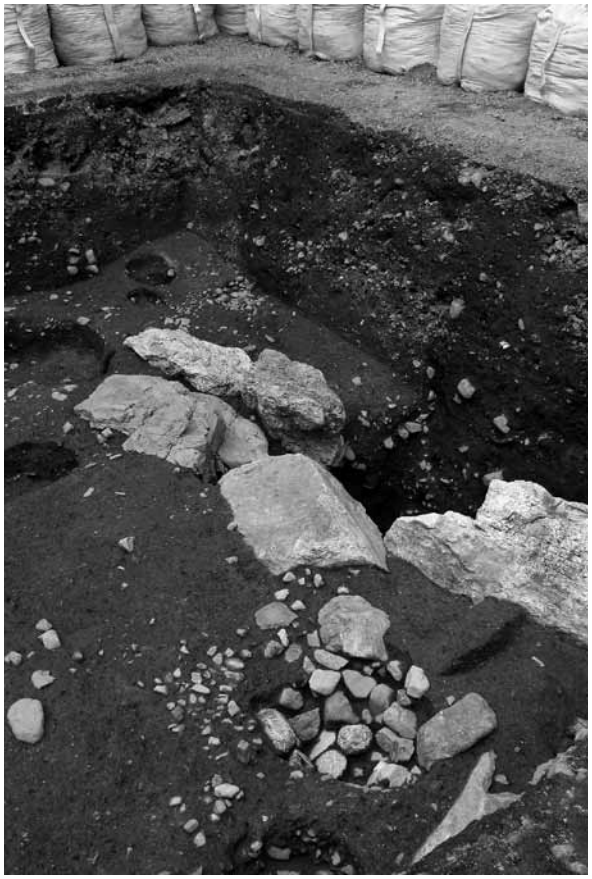
土坑２・14・32・67実測図（１：40）

1　調査区西半第２面全景（東から）

2　調査区西半第２面全景（北から）

1　調査区西半第２面全景（北東から）

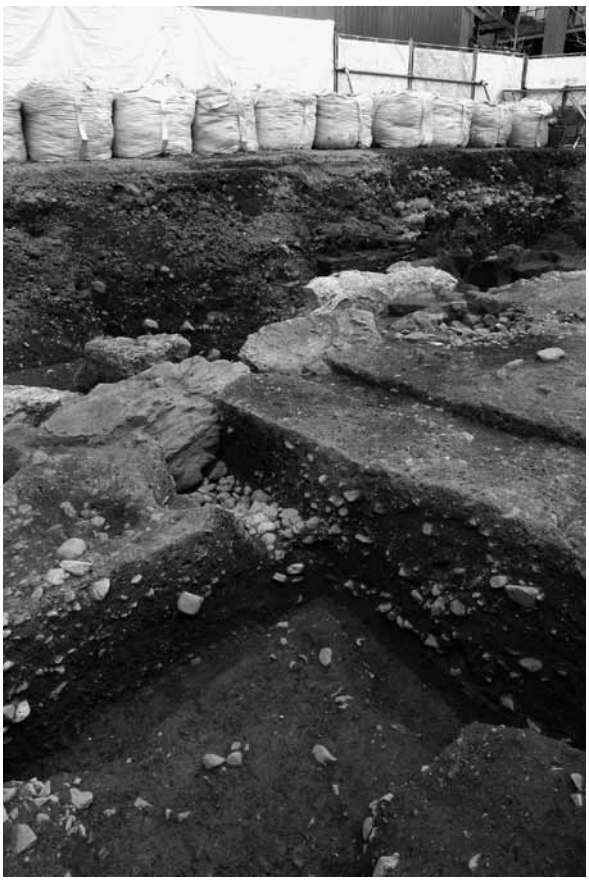
2　滝石組75（北西から）



3　滝石組75（南東から）

1　土坑72と滝石組75（北東から）

2　土坑72（北東から）



3　陸部造成土断割状況（南西から）

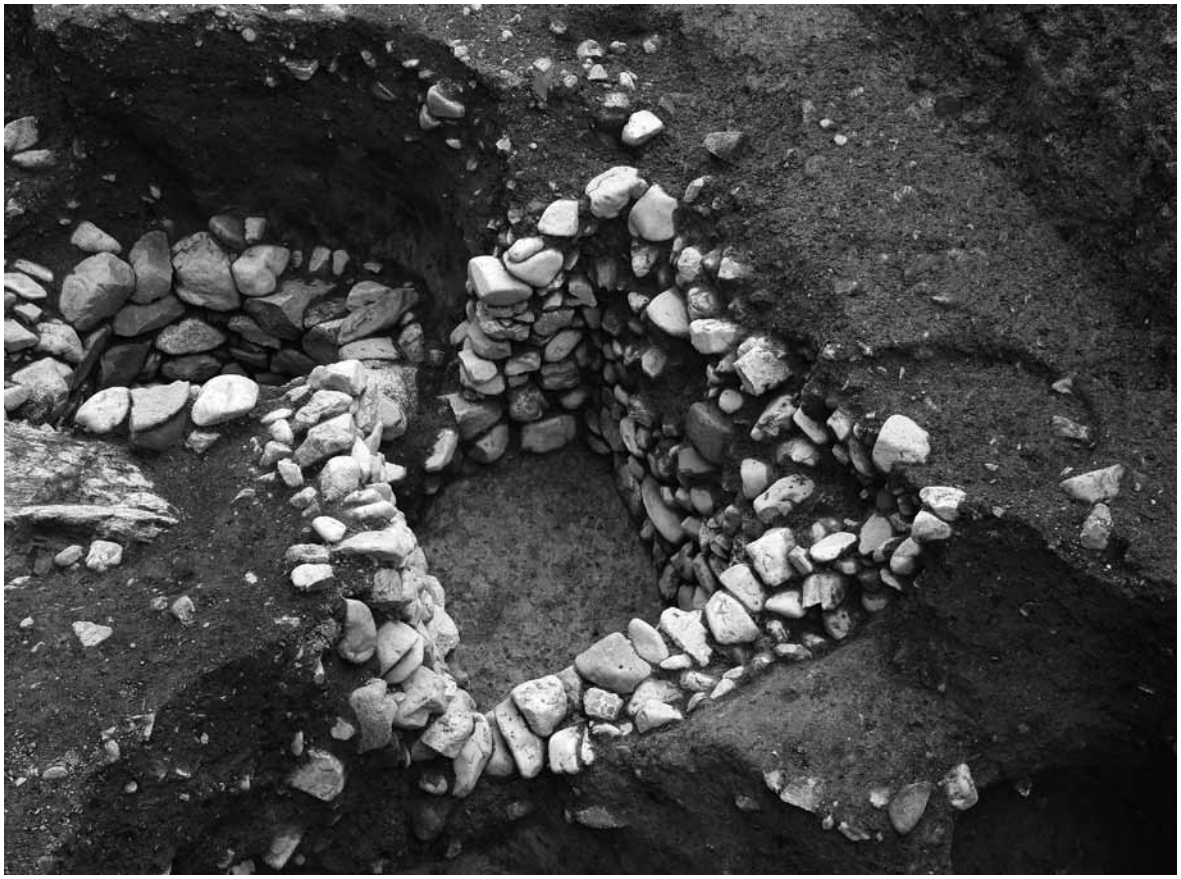
1　調査区西半第１面全景（南東から）

2　調査区東半第１面全景（南西から）

1　石室74・34・35・36（西から）

2　石室74（東から）

3　石室74と景石８（北東から）



1　石室45（北西から）

2　石室45（北東から）

3　石室71（北東から）

1

2

3

8

20

24

26
27
28

31

32

37

44

50

52

53

土器類

67

141

69

144

150

97

152

117

153

±1

±14

±15

土器類・土製品

報　告　書　抄　録

ふりがな	むろまちどのあと・かみぎょういせき
書名	室町殿跡・上京遺跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２０－１
編著者名	松永修平
編集機関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発行所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2020年９月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
室町殿跡（むろまちどのあと） 上京遺跡（かみぎょういせき）	京都市上京区（きょうとしかみぎょうく） 御所八幡町（ごしょはちまんちょう） 110-13･14･15	26100		35度 03分 03秒	135度 75分 91秒	2020年１月27日～2020年４月10日	120㎡	ビル建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
室町殿跡 上京遺跡	邸宅跡 都城跡	室町時代	庭園遺構（池部・陸部・滝石組・景石）、土坑	土師器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類	足利義政期の室町殿の庭園遺構（池部・陸部・滝石組・景石）を検出した。室町殿の遺構は地中保存されることとなった。
		安土桃山時代～江戸時代	柱穴列、石室、井戸、土坑、集石土坑	土師器、白色土器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、輸入陶磁器、瓦類、土製品、ガラス製品、金属製品、銭貨	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-1

室町殿跡・上京遺跡

発行日　2020年9月30日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　℡ 075-256-0961